

第3回 「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座
なぜ開門調査をめざすのか 韓国の事例と伝統漁法から学ぶ
講演録

日 時：平成28年7月31日（日）

場 所：ウインクあいち 10階 1001会議室

（原田委員）

皆様、間もなく開演をいたします。今暫くお待ち下さい。今日は暑い中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。後1分ほどで開催をさせていただきますので、どうぞお席の方にお着き下さいますようよろしくお願いいたします。

さて、大変お待たせをいたしました。お時間となりましたので、会を始めさせていただきますと思います。どうぞよろしくお願いをいたします。

ただ今より第3回「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座開始させていただきます。第3回となります今回のテーマは、なぜ開門調査をめざすのか 韓国の事例と伝統漁法から学ぶ と題しまして、第1部では韓国のナクトンガンの取組のお話をお伺いし、日本の長良川の課題を皆さんで考えたいと思っております。

第1部、最初の講演では韓国、釜山市からお越しく下さいました釜山広域市気候環境局長でいらっしゃいます李根熹さんに釜山の取組をご講演いただきます。続きまして、2つめの講演は本講座主催の愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の座長であります小島敏郎より検討委員会の検討状況を講演いたします。そしてその後、法政大学教授で当委員会の委員でいらっしゃいます伊藤達也さんの司会で長良川市民学習会事務局長でいらっしゃいます武藤仁様をお迎えしまして、そして講演して下さいました李根熹さん、そして小島敏郎さんとのパネルディスカッションとなります。

ここで第1部終了で、3時から10分間の休憩を取らせていただきまして、第2部では、川漁師と伝統漁法をテーマにいたしまして、写真家の磯貝政司さんの撮影した長良川の写真をご覧いただきながら、磯貝さんと、そして長良川の漁師でいらっしゃいます大橋亮一さんのお二人のトークを楽しんでいただこうと思っております。

そして最後には、お約束でありますけどもワイワイ談義ということで、第2部のテーマであります川漁師と伝統漁法をテーマにしましたパネルディスカッションを行いたいと思っております。こちらでもゲストに元天竜川漁協の組合長でいらっしゃって現在は顧問をしていらっしゃいます秋山雄司さんをお迎えをいたしまして、磯貝政司さんそして当委員会の委員であります大橋委員、そして山本敏哉委員、蔵治光一郎委員と、私の司会でワイワイ談義ということで、目標4時半終了を目指しております。

どうぞ、長時間でありますけれども、たっぷりとお話を楽しんでいただけたらと思っております。そして、1部と2部のそれぞれ終わりにお時間を作りまして皆様からの質問の時間も

作りたいと思いますのでご質問ある方どうぞ挙手いただいて質問をお願いいたします。

はい。大変お待たせをいたしました。それでは一つ目の講演に移らせていただきます。最初の講演は、釜山市の河口堰問題へ取り組んでいらっしゃる、釜山広域市気候環境局長の李根熹さんにご講演をお願いしたいと思います。李さんよろしく願いいたします。拍手でお迎え下さい。

(李根熹氏)

こんにちは。釜山広域市の李と申します。まず第3回「清流長良川流域の生き物・生活・産業」の連続講座にお招き下さいました、長良川河口堰最適運用検討委員会の座長でいらっしゃる小島敏郎教授、河道の生態復元に一生懸命取り組んでいらっしゃる長良川市民学習会関係者の方々、並びに愛知県振興部土地水資源課の皆様方にお礼を申し上げます。この意義深い場で釜山市で進めているナクトンガンの河口堰の水門開放について、この間の推進の現況についてお話申し上げる機会をいただき大変嬉しく思っております。今回の機会が愛知県と釜山市にとって河口堰の開放に向けた行動の努力・方策を模索するきっかけになればと思います。

ではこれからナクトンガン河口堰の水門開放についてご紹介させていただきます。少し発表量が多いので、少し早めに行きますのでご理解いただきたいです。

目次ですが、まず河口堰の建設背景、2番目はこの韓国の、この前の大統領の李大統領の時代に4大江事業がありました。その一つであるナクトンガン再生事業について少し説明した後でこの河口堰の現況、そして終わりに河口堰の開放に向けての努力について説明させていただきます。

この地図は、韓国は五つの大きい流域に分かれています。この国の河川というのはこの五つですが、この中でナクトンガンと言う流域はこの辺で、この中で河口堰があるところはこの辺です。ナクトンガンの長さは510キロメートルで、その中で20キロくらいが釜山圏のナクトンガンの圏になっております。この一番下に、ここに堰が造られています。この地域を少し詳しく説明すると、この地域は平坦な平野地です。それでここはナクトンガン本流から、これは西ナクトンガンと言うんですけど、この水門があります。この水門から農業用水やそれを供給する形になっておりますし、これも下に水門がありまして、ここは海水を調整しております。

これは建設の背景ですが、1992年くらいで取水中断が起きておりました。その時の新聞の記事ですが、色んなことが書いてあります。この年度別に取水中断日数はこの表のようになっております。

これは河口堰の建設前と建設後の比較ですが、建設前は44キロまで塩水が遡っています。それが、河口堰ができた後はこのように遮断されております。

もう少し、詳しく説明すると、この図からずっとここまで遡って塩水が遡っていました。

それで渇水期の場合は取水口とかに影響を及ぼしました。

これは河口堰の建設の沿革ですが81年から実施設計、河口堰の建設は87年に終わって、7年から現在までこの左側なんです、ここで今河口堰が造られています。あとは4大江事業の一つとして2009年から2013年まで、右側の方の水門型を、初めは土で堤防のようなもので造られていますが、洪水量が増えたため、これを水門の形で改造しました。

これは建設のときの写真の一部です。この河口堰が出来たことによって、効果というか、それは生活・工業・農業用水の安定的な確保、周辺湿地などを埋め立てて用地の確保、それで釜山都心部と西の慶南地域を繋ぐ架け橋として地域の開発を促進しました。

これは、先ほど説明しましたが、初めはこのようにでんとした土の堰の形で造られたんですが、計画洪水量の増大に備えて、洪水の排除能力を上昇するために改造しました。

2番目は、このナクトンガン再生事業についてですが、その概要です。再生事業の概要は、目的は洪水予防及び渇水期水量確保、それと河川整備事業などになっております。その中で、堰の建設というか、このナクトンガンを八つの堤防、堰、河川ダムのようなものと考えればよいです。堰を八つと大規模な浚渫が行われました。

その中で釜山圏の事業の概要ですが、目的は河川環境整備及び洪水予防事業などが行われました。事業費はこのようになっておりますし、四つの事業に分かれています。この中で重要なのはナクトンガン本流の整備が行われまして、これによってこの下から海水が遡っても、昔はこれは全部農作地とかビニールハウスだったんですけど、それが整備されたため、塩水が遡っても被害がないということができました。それと右の方は、先ほど話した右の水門が造られました。

これを詳しく見ると、このように五つの河川敷地があります。これは少し高いですが四つの方は少し低くて、農作地として利用されました。この一つですが、このナクトンガン下流のほうはやっぱり渡り鳥の渡来地としてよく知られています。その中で一番下にあるこの島は韓国の中でもよく知られてますが、それが初めは、この全体がたまねぎの畑というかそんな感じだったのですが、事業によって徐々に自然の湿地という形で変化しました。上の方も4大江事業によって湿地とか公園のような形で、一部は自然の形で変化しました。初めは浚渫の土を積んだところだったんですが、これを湿地とか散策路地、公園のように造りました。

この2番目の上の方ですが、ここも初めは色んな田んぼがありましたが、それを全部補償した後でこのように自然の渡り鳥の餌場とか自然湿地を復元しました。

その一部の写真です。これをもっと広げて渡り鳥渡来地の休息地というかそんな感じで湿地を復元しました。

3番目のこの河川敷地が一番大きいですが、この中で、この大きい沢で約143万㎡ですね。全体は5つの構成敷地は約450万㎡くらいですね。その中でこっちの方が一番大きいですが、初めて自然型の湿地で残されています。この辺が農作地としてそれを整備した

ものです。これです。このように今、農作をしています。このように新しく水路型の湿地を復元しました。この域が汽水域になればもっと生物の多様性が回復できると思っています。

これも4番目ですがここも広い範囲でビニールハウスで農作をやってきました。これを一部はこのように体育施設とか駐車場を作って運動施設で人が利用するようにしました。もう一つはこのビニールハウスだったんですが、このアブラ菜を作ってそれが春になるともっと花の舞ってるような形で、2012年から始まって今年4年目を迎えました。一番上の方ですが、もっとこっちの方は係留場とか屋外プールとか体育施設を計画して今、終わったところですが、こっちの方の特徴としては、この周りに大きなマンションが、マンション団地がありまして大勢の人がこの公園を利用するように計画をしました。

このようになっていますが、これは実施設計の図です。下の方が、このように自然型の湿地のようなものと人が利用するような形で造りました。

3番目は堰の現況についてですが、この左側の堰はここに主水門が6門あります。調節水門がここに2門とここで2門あります。それで魚道が二つあります。それで閘門が一つあります。主にこの主水門は洪水のときに放流する形になっております。普通はこれはあまり運用しないことになっております。正面図と断面図はこのようになっていますが、これは今、長良川の堰と違って、これはラジアルゲートと言うんですが、長良川のよりも少し運営が難しいというか、洪水の時だけこれを使うんですね。(微調整ができないので)開放に向けては、これをもっと改造する必要があります。

調節水門も同じですが、これもラジアルゲートで今後、開放のためには改造、改善する必要があります。魚道が二つあります。

閘門の説明をしますが、初めはこのように一つの排水門がありました。それを計画洪水量が増えることによってこのように今、鳥観図ですがこのように改造しました。今、主水門はここに三つあります。それと一つ調節水門がここにあります。これは長良川のように2段セルローラーゲイトです。この水門なら淡水とか海水を入れることは易しいのでこれを調節しながら上の方へ汽水を入れようということが釜山市の考え方です。

これは河口堰の水門運用のやり方ですが、水位運用基準はレベルで、この位で維持しています。水門運営は、通常の場合、この河口堰の上流水位が下流水位より0.2メートルである場合、水門をオープンします。洪水の時は、先ほどお話した八つの堰の中で一番下にあるこの堰の通過流量によって、この水門を調節しております。全部左側の水門を上げて、あとはこの量が増えることによって右側の水門を上げます。

次はこの河口堰周辺の生態現況ですが、生態的な価値としては、海水と淡水が混じり合う汽水域として多様な種の生物が生息しております。また韓国最大の湿地の一つであり、世界的な渡り鳥の到来地として生態的価値が高いというところと、それで韓国政府から、天然記念物として、渡り鳥の到来地として指定されており、五つの法律に基づいて保護さ

れています。この部分が今、文化財保護区域になっています。この地域です。この地域は特に夏の場合コアジサシの繁殖地として有名なところですが、季節別の渡り鳥は、春と秋はシギとかチドリが飛んできます。それと夏はコアジサシ、冬は白鳥と鴨が多く越冬するところですが。

次は魚類の調査ですが、魚類の場合、上下流の移動のため魚道、閘門施設を運営してまですから、ここからモニタリングした結果になっております。ただ、魚がだんだん減ったという結果が出ています。

4番目は河口堰の解放に向けての努力についてご説明させていただきます。まず背景は2012年のナクトンガン再生事業が終わって、河川敷の4地区の農作地整備が終わりました。それで、本事業によって水門開放で海水が遡上しても農業への被害がなくなる。また河口から8キロ上流の釜山市で運営していた工業取水口がありまして、ここを上流に移転する計画を立てて、それが今年12月頃にこの計画も終わりました。河口の水門開放に向けての妨害要素が除去されたということで、この背景で2012年12月に大統領選挙がありました。あの時に野党候補がナクトンガンの水門開放を公約採択しました。

政府の環境部ですが、あの時、13年から1次と2次を河口水門解放に対する民間へ委託調査をしました。それを受けて14年に釜山市長選挙で与野党の候補ともにナクトンガン河口の水門開放に対しての政府の用役結果に従って開放するという公約を採択しました。

それで去年、現、釜山市長から、17年から順次的に開放推進と25年には完全開放を目指して努力するという約束をしました。

第1次の用役の結果は、汽水域の生態系の消失とかアオコの増加、そして回遊性魚類が減ったということを明らかにしました。

第2次の用役の結果ですが、コンピュータシミュレーションによって、実際に水門を開けるのだったらどの位まであまり被害を生じないで(汽水)を上げられるとか、シミュレーションしました。それで上流10キロくらいまで汽水域生態系を造成することが可能だとの結果が出ました。これは、河川水量と塩分侵入距離をシミュレーションした結果になっております。

それを受けて釜山市の主な推進の状況ですが、去年9月ですね。釜山市長からナクトンガンの河口堰の順次の解放についての記者会見をしました。今年1月から河川再生推進団という正式な組織を作って、それを拡大再編しました。それと市長が直接に国土交通部を訪問して第3次用役をするように要請しました。その場合、実際に水門を開放しながら実証研究が必要だと訴えました。

また、NGO団体の役割も重要な要素なので、その活動は、2012年7月にくらいで、ナクトンガン河口汽水生態系復元協議会を発足しました。それ以来いろいろな討論会を主催しました。その討論とかワークショップとか、それによっていろんな政治家とか新聞に載

せるように、いろいろな活動をしました。これは一つの NGO 団体の活動の写真です。

今、重要なことは、やはり対策に対してですが、前提条件としては河口堰開放で上流への塩分流入による農業用水とか生活用水及び地下水に被害が発生してはいけないという条件と、それによって部分開放後の問題がない場合、完全開放を推進するということを決めました。この問題が起こらないようにするためには、このような対策が必要です。

短期対策としては、先ほど説明しましたが、工業用水の取水口の上流移転、西ナクトンガンの農業用水の対策、それと上流塩分モニタリングシステムの設置、地下水も同じです。長期対策としては、この上流の生活用水の取水場の変更とかその対策が必要です。その一つとして、より上流へ移転するか、あるいは他の場所などの上水源に変更するか、膜処理とかを導入して汽水の水を処理することなどが考えられます。

これは短期対策の一つで、今、ここ 5 キロくらい離れていますが、もっと上に移転します。今年、整備が終わります。

2 番目は、今も先ほど話しましたが、ここに農業用水に補給するためここに水門がありまして、この水門は一つのローラーゲートですので、この下から塩分が入ると農業用水に影響を及ぼしますから、それを防ぐために 2 段ローラーゲートに改善します。そうすると上から淡水だけが溢れるような形で改善する必要があります。

塩分が入る用意として自動測定 8 か所と固定測定 9 か所の設置を今年 9 月までに終わる予定です。実際のモニタリングの結果ですが、渇水期に 1 次調査をやりました。あの時も少し水門から塩分が入ることが分かりました。このような結果です。大体 9 キロまでもう少しずつ、渇水期の方は 1 2 キロまで、深さ 7 メートルくらいまで入ることを確認しました。それが 3 月には雨が降りまして、その結果としては全部塩分がないのが確認されました。

短期対策としても地下水も利用していますが、ただ、塩素イオン濃度が基準を超過していますから、地下水の開発とか利用はあんまりしないという調査結果をもらいました。今後、ナクトンガンの河口堰の解放による地下水の塩分変化とかそれを観測する必要があると思って続いて継続的にモニタリングしております。

長期的な対策ですが、上に生活用水、工業用水、農業用水地がありますから、この用水までは被害が、塩分がまずは入らないようにしますが、長期的には影響を及ぼす可能性がありますので、これに対する対策も模索しております。先ほど三つの方法を話しましたが、まずは塩分と海水が混ざれば、層を作って上の淡水だけを生活用水とか工業用水に使えばあんまりお金が掛からずに開放ができるのではないかと思っております。釜山市は、実際に堰を運営する国土交通部に、3 次用役をして実際の経過を見ようということを要請しております。

以上で釜山の実情についてご説明申し上げました。ご清聴ありがとうございました。

(原田委員)

李さんどうもありがとうございました。30分のご講演頂きましてありがとうございました。ありがとうございます。李根熹さんの講演でした。

続きましては、二つ目の講演ということで、長良川河口堰の開門調査の検討がどこまで進んだのかということで、当委員会の座長であります小島敏郎委員が検討委員会の検討議論状況をご講演頂きます。お願いいたします。

(小島座長)

小島と申します。今、お話を聞いていて、もう調査が始まっている。遅れてはならじ、なのですが、何故、長良川河口堰の開門調査を求めているか、今どこまで進んでいるかということをお話したいと思います。それではお願いします。

長良川河口堰も同じです。2011年冬の寒い選挙だったのですが、大村知事、河村市長の選挙、共同マニフェストです。長良川河口堰の開門調査をやると、ここから始まった訳であります。それで開門調査をどうやってやるかということで、大村知事のところでプロジェクトチームを設置いたしました。この検討は1年弱ということで、正月、1月の25日に報告書を知事に提出をする。専門的な報告も作っておりまして、専門委員会報告というものも纏まった。

検討会としては、専門家の報告はまとまった訳ですが、次に、国土交通省とどういうふうに話をしようかということで、愛知県の委嘱する専門家と国土交通省が委嘱する専門家、この両方の合同会議をやって専門的な議論を詰めようじゃないか、という提案を愛知県の方からいたしました。

なかなか国土交通省に受けていただけなくて、どういうふうに合同会議持っていけるのかという準備会議を設けることにいたしました。準備会議、合同会議準備会議というものを開催いたしまして、双方の先生が集まって話をしたのですが、議論をすると合同会議をやったらいけないかという結論にすぐなってしまう。

ところが問題は、そういう準備会の報告を頂いて国土交通省に持って行っても、国土交通省がそれじゃやめよう、行政の判断としてそうならないだろうということが、かなりの確率でわかっていたものですから、少しこの準備会議はペンディングというような状況になっております。

国土交通省と愛知県の話をするということなのですが、愛知県そのものもやらなきゃいけないことがあるということで、愛知県の作業として最適運用検討委員会という私どもの検討会と、それから行政も詰めて頂かなければいけないということで、愛知県庁の中に庁内検討チームというものを作って作業しているところであります。

国土交通省に対して公開質問状を送り、回答をいただいて、2回目の検討委員会からの国土交通省に対する質問状を7月の27日に送りました。ホームページに載っておりますので、ご覧いただきたいと思います。このプロジェクトチームあるいは専門委員会の報告

も、あるいは国土交通省との質問状のやり取りもとても難しいことが書いてあるので、それではなかなか皆様方に理解をしていただけないということで、連続講座というものを始めました。

いわゆる長良川ってどんなに素敵なところなのだろうということで、今日がその3回目、3回目にあたりましてパンフレットを作りました。このパンフレットですね、とても高いです。県庁にお願いしたのですが、1冊千円くらいするんですよ。すごく高いのですが、今はインターネットで注文すると格安でできるということで、そのうち増刷をしようかというふうに思っておりますが、役所のシステムでは1冊千円くらい掛かってしまうので、役所でないところで作っていただきますと7万円くらいで千冊できる。

これでも僕の友達の会社の人に聞いたら高すぎると言われていまして、今やインターネットの世界では、ものすごく安くできるという状況になっておりますので、今日はものすごく貴重なパンフレットを皆様方お手にしている、こういうことになる訳です。

愛知県ですね、大村知事、よく言いますが、愛知県は環境のことを一生懸命やってきました。ホップ・ステップ・ジャンプだと。ホップが環境万博、ステップがCOP10だと、パンフレットの裏表紙に愛知ターゲットが載っておりますが、生物多様性条約の第10回会議というのを名古屋でやりました。そしてジャンプ、あんまり広がらなかったのですが、持続可能な開発のための教育の10年、ESDですね。

これは私が環境省にいた時に、ヨハネスブルグサミットというものがありませんでしたが、その時にいろんなNGOから提案を聞いて、NGOの方から教育の10年というのをやりたいんだという提案があって、それを政府提案に採用して国連の会議に持って行って採用された。これは日本発なんです。

折角、日本の政府がいいことやっている、日本のNGOもいいことやっているのに、残念ながらあまり広がらなかった。愛知県と岡山県がこれを引き受けていただいて、愛知県と岡山県ではすごく有名ではないかと思うのですが、どうでしょうか。

前史としてですね、名古屋市が藤前干潟の埋め立て計画を断念、以後ラムサールの湿地になっておりますが、これも私が環境省のときに、地元の問題として大分やりましたけれども、ちょっと大変で。

実は、大村知事と河村市長が最初に、ウェディングケーキではないですが、一緒にやった仕事が、藤前干潟の反対だったんですね。当時は、すべての政党が藤前干潟を埋めてしまえ。国会議員も、市議員も、県議員も全部埋めてしまえ。と言う中で、NGOの人達がやっぱり大切だ。とおっしゃっていて、最初に河村さんが、当時、国会議員、民主党だったんですが、じゃ、俺が反対してもいいよ。ということで、最初に河村さんが反対だと言ってくれた。次に、河村さんが野党が反対しているだけではだめだ、自民党でも誰か一緒に埋め立てはダメだと言ってくれないか。と言って、俺も言うてもいいよ。と言ったのが大村さんなんです。国会議員でただ2人です。2人だけが藤前干潟を守ろう。と言ってくれたんですね。

これが、大村、河村の原点なんですね。と言うことで、ちょっと昔話から。でも、ここから始まってらんだらうな、ということをお話しておきたいと思います。

なぜ開門調査を求めているか。河口堰はもうできているので、その堰の最も最適な運用は何だろうか。洪水対策、利水対策、環境保全、それぞれの観点から一番いい方法というものがある訳ですが、この全体を考えて、最もいい、全体最適解と言いますか、いい運用というものは何だろうか。ということを考えたい、ということがパンフレットの13、14ページにも書いてあります。

洪水対策です。河口堰は洪水対策のために造ったんだ、ではありませんね。洪水のときには、つまり、上流から沢山の水が流れてくるときには、河口堰は邪魔者でしかありませんから、当然のことながら全部開いています。こんなところで堰で堰き止めといたら、堤防から水が溢れてしまいますから、洪水の時には全面的に開いている訳です。

じゃ、洪水対策と河口堰はどういう関係にあるのか、というのは風が吹けば桶屋が儲かるなんですけど、洪水対策は大量の水を流すために、浚渫をして、容量を大きくする。容量を大きくする、つまり河道が広くすると塩水が長良川を遡る。遡ると農業用水や工業用水に支障が起きる。だから河口堰がいるんだ。こういう、風が吹くと桶屋が儲かる式の議論になる訳ですね。

利水ですね。長良川の水を作ろう、使おうと考えたときは、まだ、日本が高度経済成長、これからももっとお金が儲かるんだという時代に構想するわけですね。ですから工業用水がすごく多かったんですね。ところが計画をしているうちに、そんなに工場は水を使わないんじゃないか、ということにハタと気が付きましてですね。三重県が、四日市のコンビナート、沢山あるんですけども、こんなに沢山工業用水をもらっていると、到底、三重県じゃはけない。だから返上します。こんなに沢山要らないんだと。でも、ところが、もう計画作っちゃいましたから、三重県が要らないんだと言うと河口堰ができないんですね。ここでホワイトナイトですね、白い騎士が現れる訳です。それが、愛知県ですね。わかった、三重県が、水が使えないなら、愛知県がそれを引き受けてやろう。と言って、ナイトが現れる訳です。ところがですね、ホワイトナイトの役割を買って出たのは良かったんですが、愛知県もこの工業用水使えない、ということになってですね、これはいかん。工業用水は企業からお金をもらわなきゃいけないんです。ところが、企業はとてもしビアなので、そんなもの、要らない水は買えないですね。買えないと、税金を投入しなきゃいけない。そうすると批判が起きる。ということですから、何をやったか。そうだ、水道用水にしまえばいいんだ。水道用水だと、水道水の料金に上乗せすれば沢山の人が払ってくれるわけです。こういうことで、この水の料金を水道使用者に負担してもらっちゃおう、ということで工業用水は水道用水になった。それでも全体の16%しか使っていないですね。民間の感覚からすると遊休施設が84%もあるということになるんですが、公共事業では、いいえ、それは、渇水のためのリザーブであります。という論理になる訳です。

じゃ、水利用16%のために、いくらお金をかけたのか。大体1,500億くらいですね。

で、愛知県です。愛知県は527億ということになっていてですね、使っていない84%の水はまさかの時のリザーブ。でも最初からこれはリザーブなんですよと言われて、県民や名古屋市もそうです、名古屋市はほとんどゼロ。使ってないです。金を払っただけです。ということで、さあ、作ろうということになったかどうかは、これはわからないですね。

何でそんなことになるのか。もともと三重県が工業用水が要るんだ、こんなに沢山欲しいんだ、と言って、そこから、最初から狂ってくるわけですけども、水の需要の予測ですね、これは県や市が作るんですけども、常に水は沢山要るんだ、沢山要るんだ、というふうに、計画を作る訳です。

ところが、実際はこういう流れですから、過大な水の需要予測を満たすために供給が必要だ、ダムが必要だ、河口堰が必要だ、とこういうふうになってくるわけですが。ひょっとしたら、水の供給計画が先にあって、ダムを造るんだ、ということがあって、それに合わせて水の需要予測を作ったんじゃないか。まさかそんなことはないでしょうね、と思うのですが、これだけいつもこういうふうになっていると、え、そういうこともあるのかしら、という疑惑が出てしまうので、これからはそういうことがないように、きっちりとした水の需要計画を作れば、そういう疑いもなくなる。

今、ちょっと東京都の方も選挙があつてですね、色々やっているんですが、東京都は人が増えているにも関わらず、水需要は減少しているんです。少子高齢化でどこでも将来は人口が減るということになっています。東京都は凄いですよ、ずっと増えてる。それでも水の需要は減っているんですね。東京都でさえそうですから、増えるなんてことはあり得ない、と思ったりもするんです。

長良川の自然の流れを取り戻す、これが河口堰の開門調査の大きな願いであります。川から海へ、海から川へ、魚は自由に行き来をしていました。2部でやりますが、漁師さん達は色々な方法で魚を採っていました。きれいなお写真ですね。

ところがですね、河口堰は、水資源機構、国土交通省が管理をしていますから、愛知県が、開けるぞ。と言っても、他人のモノですから、他人のモノ、家に行って玄関をガラガラと勝手に開ける訳にはいかない。ということですので、お願いします。と愛知県は、言わざるを得ないんですね。この交渉がなかなか大変ですね。何かラブレターの遣り取りみたいに、質問状を出して、お答えが返ってきて、メリーさんのお手紙じゃないですけど、またお手紙を出して、できれば直接にお話をした方が、いいんじゃないか、というふうには思っているんですね。

プチ開門の提案です。直ちに河口堰を全面開門しろ。と、公約でもそうは言ってはいないですね。開門調査ですから。最適解を明らかにするための開門調査には5年ほどかかる。これはプロジェクトチームで出しました。

じゃ、段階的にやっていきましょう。ということで、プチ開門ということ。まず、開けてみよう。釜山ではもう開けてるということなので、ちょっと出遅れちゃったなあ、と思っているんですが、提案は農閑期ですけど、これにはこだわらないということで。検討

の方向が大切ですね。専門家の検討の態度としては「絶対に塩水を遡上させない。」という前提は置かない。国土交通省のは、この前提で弾力的な運用をされているので、ここが違うということですね。

塩水遡上30キロ、というふうに皆さん、もうお馴染みの絵ですね、多分ね。ところが、ここは、仮想と書いてあるんですね。仮想なんですよ。ところが、これをずっと見ていると、仮想、仮想、仮想、現実。どこかで現実になってしまうんですね。でも、これはちゃんと役所ですから、嘘は書いてないです。仮想なんです。計算をしたらこうなります。まさか、こんなふうに行くわけではないですけどね。本当にそうなんですか、ということで今本先生に何回か測っていただいて、でも川底も変わっているしね、ほんとにそうかしら、どんな計算したの、それは、実測値と合っているの、などという疑問を今投げかけているところです。

方法が大変だ、大変だ。農業用水、工業用水、あっ、また農業用水二つも書いてありますね、ちょっと間違いですね。影響がない。これ水道のつもりだったんですね。プチ開門は可能で一すということ、対策が書いてあります。

最後、パンフレットに書きました。EUの河川再生、アメリカのダム撤去、今日、ご説明をしていただいた韓国の動き。

日本は実は自然再生法という法律があるんですけども、法律はできてはいますけども、その実現は途上ということでもあります。荒瀬ダムはできたんですが、唯一の例でしょうね。

ポイントですね、3つ挙げました。自然現象と被害は違うんです。洪水があっても、被害が起きないようにしましょう。被害が起きないようにしましょうね。塩水が上がっても塩害が起きないようにしましょう。渇水、でも渇水被害とは違いますね。節水、節水だとなんか世の中がひっくり返っているような気がしますけど、節水と断水は違いますね。3.11の原発の事故以来、電力の問題、節電と停電は違いますね。停電を起こさせないために、節電をしているわけですから被害が生じないように節電しましょう。被害が生じないように節水をしましょう。全く同じことなんですね。だから、節電自体が被害ではありません。節水自体が被害ではありません。

ポイント2です。諦めない。これが大切ね。国土交通省が30年以上かけて造ったんです。開けましょうという努力はようやく始まったばかりなんです。3年や4年できないからといってですね、大村は何をしているんだ、という記事が時々出てきますが、しかし、この国土交通省の30年以上かけたこの努力に比べれば、我々の努力はまだ足りないんです。ということで、分厚い世論の力が必要です。ということで、パンフレットも作りました。

最後です。住民の力、基本的には住民の力があって、政治家や専門家が生きるんですけども。水戸黄門、今あんまり好きかどうか分かりませんが、今日いらっしゃってる方はきっと水戸黄門が好きですね。ウチの学生は見たことがないって言うんですけど。水戸黄門は、越後屋さんとお代官様が悪いことをして庶民を虐げる。庶民は何をするか。さらに、上位

の権力者に頼むんですね。黄門様に頼むんですよ。お役所に頼むんですね。で、お役所の偉い人がいて水戸黄門様が印籠出してくれるとお代官様と越後屋さんを懲らしめてくれる。世界に評価される7人の侍はですね、野盗が来る訳です。馬に乗って。そいつらを撃退するために、農民は何したか。自分たちのお金を払って用心棒を雇うんですよ。最後は用心棒と一緒に戦って自分たちの力で野盗を撃退するんですね。これが、水戸黄門と7人の侍の違いなんです。だから、お代官様が悪いことをしたら、さらに上位の権力者に頼むということではなくて、7人の侍でいかないとだめですよ。これが民主主義ですよ。というので、最後を締めくくらせていただきます。

ちょっと長くなりました。以上です。

(原田委員)

どうもありがとうございました。小島座長ありがとうございました。検討委員会の検討状況を講演いただきました。

それでは、続きましてパネルディスカッションに移らせていただきたいと思います。ここからは伊藤委員にお願いしたいと思います。伊藤達也委員、お願いいたします。

そして、先ほどご講演いただきました李さん、そして小島座長、そして、ここからはですね、もう一方、御紹介させていただきます。武藤仁さん、ご登壇いただきたいと思います。長良川市民学習会事務局長でいらっしゃいます、武藤様、どうぞステージの方にお上がりいただきますようお願いをいたします。

ただ今、準備の方をしております。名札を付けまして進めていきたいと思っております。

今、ここで講演が二つありました。その質問など皆さんありましたら、このパネルディスカッションの後にどうぞ質問をしていただきましたらと思っております。

はい、それでは、よろしくをお願いいたします。

(伊藤委員)

早速、始めたいと思っております。

すいません。ちょっとこの3日間、学生を連れて名古屋に来て、日中暑いところ解説しまくって、ちょっと声がかかれていますけど、大丈夫ですよ、マイクで通ると思っております。

いただいた時間、3時までということなので、テキパキとなるべくフロアの方からの質問とか、特に今日は、釜山のナクトンガンの河口堰に関するお話を李さんの方からいただきましたので、是非、質問とかいただければと思っております。では、早速始めたいと思っております。

初っぱなから武藤さんの方から両方の問題によく活動されてて、今日のお話を聞かれて、それに対して是非、簡単にコメント、あとその先、もしあれば質問をお願いします。

(武藤仁氏)

長良川市民学習会の武藤です、よろしく申し上げます。今日の話聞いていて、非常に

似ている所があるなと思いつつ、全く違うなとも思っています。遠いところから来ていただきましたので、特に李局長に是非、聞きたいことを忘れないうちに聞きたいと思っています。

実は、私たちは、河口堰建設反対運動はみんなやっておたんですけど、これを「開門しよう」という声が出てきたのは、2008年か9年ぐらいからでした。2009年に、岐阜では海のない県で、海づくり大会という話がありました。そのとき海と川が繋がっていない岐阜県の長良川で何でやるのかと声が上がって、河口堰開門をアピールする「市民による海づくり大会」をやろうということになり、うちの長良川市民学習会代表と藤前干潟を守る会の辻代表の呼びかけで、市民によるシンポジウムをやりました。

これが2010年で、ちょうどその秋に生物多様性 COP10 がありました。ここで私たちが目を開いたのは、やっぱり長良川問題を伊勢湾流域に広げていかなければいけないという問題と、もう一つは、ここで知り合った韓国。韓国では4大河川事業というのがありまして、数年のうちに16でしたか18でしたか、ダムを一気に大きな河川に造るという事業があり、それに反対する市民運動と私たちは知り合うことができました。そのような経験の中で河口堰の問題を知ることができました。

2013年に、この4大河川を私たちが見に行ったとき、4大河川のうちの一つにクンガンってあるんですが、そこに河口堰があって、このクンガンのソチョン郡長さんが、長良川市民学習会と討論会をやりたいということで、私たち日本の市民団体とソチョン郡とで討論会をやりました。うまくいくといいなと、いろいろな経験・交流をしたのですが、ここでまず質問ですけど、ソチョン郡はあのとき開けるためにすごく戦っていました。ところが対岸の市が絶対、開放反対ということだった。ナクトンガンでは、他の都市との関係がどういう状況なのかを教えてください。

二つ目ですけど、釜山市のこのナクトンガンは今、報告があったように2017年に部分開放、2025年に全面開放すると市長が言っている。どこかの県や市長はよくそういうこと言うんですけど、ここの市長の素晴らしいのは、すぐにその担当部署を作ったんです。それは「河川再生推進団」という新しい課を作ったのです。今日お見えになっている金さん、ちょっと立ってください。金さんは河川推進団の職員の方で、いっしょに随行してみえましたが、金さんの課から長良川市民学習会に電話がかかってくるまで、長良川河口堰には立派な魚道があるのに、なぜ開放を求めるのか。その理由を教えてください。文書質問がありましたので、これに答えるような形でつながりが出来ていったんですけど。この河川再生推進団は非常に素晴らしいと思うんですけど、どのような仕事をやってみえるのか教えてください。

三つめです。もう一つ釜山市が素晴らしいのは、市長が打ち上げるだけでなく、具体的に検討委員会を作られた。その検討委員会や調査チームの中に、農業用水の問題とか、この開門について、釜山市では開放について、面白くないと思っている農民の方はたくさんいるが、そういう人も検討委員会に出て、討論し、すごく調査もして、反対の側の市民や

反対側の農民やそういう人たちも入れながらやっているんですけど、そういう検討委員会ですか、調査委員会ですか、そういう活動は今どういうふうなのですか。昨日も、一日、李さんと金さんと私たち長良川市民学習会で河口から輪中、それから決壊現場までずっと見て、新大江用水（農業用水）の取水口もご案内したんですけど、残念ながら、農業関係の方とは開門問題について一切会話ができない状況です。こちらは農業用水を使わない時ときに開けようという提案をしているのですが、先ずはね。そういう議論もできない状況の中で、そういう人たちをどういうふうに巻き込んで議論してみえるのか教えていただけるといいなというのが3つ目の質問です。

以上、とりあえず。

（伊藤委員）

内容的には、李さんの釜山市の河口堰の解放の問題について質問が集中していますので、そのままお願いします。

（李根熹氏）

一番目は、クンガンと違って、なぜナクトンガンの方が、このように進めたのかということに対してのことだと思えますが。クンガンの方はグンサン市と隣りにある都市との考え方が違いますよね。一つの都市の方は、開門して、もっと対応してと考えるんですけど、他の都市の方は、農業用水とか水を守るような形だから、開門に向けてうまく進まないのだと思えます。

ただ釜山の方は、20キロ、一番下の河口堰の方は、釜山市の管理地域なので、そこだけをまずは改良しようと。河口の部分の生態の多様性が復活すれば、ウナギとかシジミとかも復興しますから、経済的にも役に立つだろうと言う考え方で始めています。それが、釜山の方が速やかにいく理由だと思います。

二番目は、市長から来年度、部分開放に向けての公約と、25年を目指して完全解放に向けていきますけど、まずは、政府の用役の結果10キロまでは汽水域が可能だと。実際、日本と同じような国土交通省が管理する団体なので、それをまず国土交通部が用役して少しずつ開門を、まずは改善して、少し堰の上に塩分が入って汽水域になるとどんな形になるか、それはウナギとかシジミとかが回復できるのか、それを3年くらいで生態系をモニタリングした後で、被害とかの条件としては、さっき話したように工業用水も上流に移転しますし、農作地も河川敷地も全部整備してますから、あまり問題ないと思えます。ただ、15キロで農業用水のための水門がありまして、あそこも2段ローラーゲートで改善すれば、もっと上に塩分が遡ると思えます。その仕事を今、河川再生推進団がやっています。

もう一つが、ソウル市の川を改善する仕事がありました。河川再生推進団が釜山の真ん中にある道路、川の上にコンクリート道路がありますが、これを撤去する事業も一緒にやっています。それ二つを大きなプロジェクトとしてやっているのが河川再生推進団です。

三番目は、検討委員会ですが、もちろん反対側の声と賛成する声も、一緒に大事にして話した上で、この問題が起こる可能性がある点に対して、対策を模索するということで、検討委員会があります。釜山の行政じゃなくて、民間にまかせて、漁民と農民とか全部集めて、農民の方の反対の声が大きいんです。漁民の方が賛成で、豊かになると生態系、回遊性が回復しますから。

そういうことで、よろしいでしょうか。

(伊藤委員)

ありがとうございました。あと、すいません、フロアに行く前に、今日2人お話していただいて、それぞれの発表に対して、何かコメントとか質問とか聞いておいた方がというのがあれば簡単に李さんと小島先生お願いできますか。

また、言い足りないことがあれば足していただいて結構です。

(小島座長)

さっきの話の中でですね、いわゆる国政レベルで野党の大統領候補が開門調査を、開門しようとして、野党が勝ったり与党が勝ったりするわけですけども。そうすると野党から出て行く市長になったりとかですね、自治体の長になるとやはり大統領選挙の中で言ったことが、その地方自治体の選挙の中でも同じように言われてですね、それが進んでいく。与党の人が市長になるとやっぱり消極的とかそういうことになってるんですか、韓国では。どうでしょうか。

(李根熹氏)

それというのは非常に重要だと思います。市長が代わることによって、政策がどうなるかという問題だと思うんですけど、今、非常に幸いなのは、野党と与党と一緒に堰を開門しようということだから、国会議員とか市民団体もそうだし、ただ、国土交通部の場合、塩分が入って被害がでますから、それに対しての対策をちゃんとしないといけないということだけです。たぶん、この政策は市長によって、あまり変わらないと思います。

(伊藤委員)

日本の事情について李さんからどうですか。

(李局長)

釜山の方は、釜山の中で20キロは釜山が考え方を整理して、国会に対して要求するんですけど、愛知県の方は長良川について、愛知県だけではなくて三つの自治体があるので、それがうまくいかないと思います。その辺がどうなるかと。

(小島座長)

先ほどの白村江の話でなかなかうまくいかないというのは、自治体間で意見が違ふところ、釜山は広いところで釜山の中で意見に違いがある。

長良川の場合は、農業ですごく困るなど言っているのは、岐阜県であって、漁業の方は三重県の方にあるので、愛知県が一生懸命やろうと言っても、その歩調がなかなか難しい。

日本の場合は、国の力がすごく強いので、国土交通省、昔は各県が機関委任事務っていうかこうで、出先のような仕事をしていて、今は地方自治体が独自にやるということになっていますけど、行政の中には未だその名残があったりして、国の力が非常に強い。僕も霞ヶ関にいたのですが、霞ヶ関から愛知県、名古屋市の方に移ってきて、そっちから、霞ヶ関を見ると、国ってこんなに偉かったのかと初めてわかりましたですね。霞ヶ関から見ると、これが全く無自覚なんですよ。

当然に、地方自治体にはこういうことをやっていただくとか、あーいうことをやっていただくとか。これが偉そうに言っているとか何とかではなくてですね、それが当然だと思ってたんです。

今度は、県や市の立場から国にもものを申していると、なんでそんな事がわからないのかと思うんですが、これは完全に文化が違っているんだなと思います。

だから、本当に、国と地方自治体が対等な立場で、いわゆる分限で議論をしていると言うのは、法律上、制度上そうなんですけれども、実際には、まだそうになっていないだろうと。だから、そういうことを考えると、まず、国土交通省と詰めていって、近隣の自治体の方にも話をしないと、先ほどおっしゃった民間のレベルで、農民や漁民を入れてやるとしても、たぶん、民間の方々が岐阜県の農業の人だとか、三重県の漁業の人に呼びかけて、いっしょにやりましょうと言っても、そうは上手く行かない。愛知県が言っても、そうは上手く行かない。というところがあるということですね。

(伊藤委員)

はい。結構な時間となってきましたけど、僕の方から二つ足しますと、先程のクムガン、錦江というふうに漢字で書きます。皆さん、李さんの資料にあるんですけど、その中の5ページくらいに国家の河川流域図というので、錦江というのがあると思うんです。

ちょうど、そこは河口の部分が、日本でいうと都道府県境、向こうでいうと道の境で、多分ちょうど愛知県、三重県、岐阜県みたいな性格の異なる自治体がぶつかりあっているので多分認識が違ふだろうというのが一つ。

もう一つは、自分の意見を勝手に言って申し訳ないんですけど、韓国は地方自治を勝ち取ったのは、ある意味で民主化の後で1990年代に、ある意味では復活という形でやったと、そういうことでいうと、都道府県レベル、まあ、道とか特別市とか市町村がある意味では自分達の手で勝ち取った民主主義に対して多分非常に心を込めているのかなという気は、

僕自身韓国にずっと行ってて思います。決して民主主義の歴史が古いのではなくて、やっぱり今の世代の方々が、自分達が政治に参加するということに関して、かなり意識を持っている。中央集権でいったら、韓国の大統領制というのは、むちゃくちゃ強いですから、それと戦うというのはまた凄いことなんだと思います。

ちょっとコメントを言って、フロアの方から話しが細かくて分からんも含め、是非、これは折角、韓国釜山からお客様が、一緒に話が出来の人が来ていらっしゃるので、質問どうぞ。

(傍聴者)

私、名古屋市西区から来ました藤井と申します。先程の、李さんのご説明で、生態的価値という形で、海水と淡水が混じる汽水湖、韓国最大の湿地ということなんですけども、現在こちらの地域はラムサール条約に登録されてらっしゃるんですかね。もし、登録されていないんですしたら、そういった運動はしてらっしゃいますでしょうか。

(李根熹氏)

本当に良い質問だと思います。あっちの方は、渡り鳥の渡来地として有名な所なんですけど、まだラムサールへの登録はしていません。市からラムサール登録のために、努力していたんですけど、漁民の方がやっぱり登録すれば、法律的に不利益があるのではないかと、思って、まだ登録の報告しなくなっていました。

実際は、漁民の方は、私は誤解したと思うんですけど。

実際は、この湿地保全法律とか、韓国の国内の法律によって、湿地保護地域として指定されているんです。ですから、このラムサール条約によって、規制とかは生じなくて、韓国の国内の法律によって実際は規制しますから、それは全然関係ないんですけど、漁民が誤解して、登録はしてないですね。

釜山市としては、登録しようと続いて努力いたします。

(傍聴者)

ありがとうございました。どうも、失礼します。

(伊藤委員)

よろしいですか。続いていかがでしょうか。

(傍聴者)

名古屋の港区の山田と申します。今回初めて参加させていただいたんですけど。長良川河口堰が出来前の岐阜県における塩水被害というのは、どれぐらいあったんでしょうか。それをお聞きしたいんですけど。

(伊藤委員)

もっと詳しい方は多分フロアにいるんですけど。金額でいくらかいったそういうかたちで私は把握してませんが、被害の報告はほとんどなかったと思います。現在の岐阜県の高須輪中あたりから上流に関しては、通常の水、上流から流れてくるものによって農業用水というのは水の確保は出来ています。

塩分被害とかが農地とか土地に影響があるというのは、もっとその下流の方で、例えば先程、海水の上の淡水を、水をとるとというのが李さんの発表の中にありましたが、愛知県の福原輪中では実際にアオ取水という、そういうのを使って、ですから塩分被害はゼロにはならないとか、又は堤防からある程度塩分濃度のものが入ってきて塩害の被害があったと、そのあたりを結構はっきり言えば国もウソをついていましたので、被害じゃないやつを被害と称して地図化して皆に公表したり、そういうことをしてましたので、ゼロではないけど、僕はたいしたこと問題ではない。今の質問に対しては、岐阜県の方は私はほとんどないという認識です。はい。

すいません、ちゃんと証拠をちゃんと出せばいいんですけど、今、僕の頭の中で答えているので、まあ、だいたいそのくらいで。

(傍聴者)

ありがとうございました。

(伊藤委員)

まさか、私が答える質問がくるとは思わなかったんですが。ありがとうございます。皆さん全体に理解を深めるために是非いろんな形で質問していただければと思いますけど。いかがでしょう。あと10分。了解。はいどうぞ。マイク渡りますか。

(傍聴者)

私、愛知県の豊橋市からまいりました山本ですが、うち貝屋でして、昔、ナクトンガンのシジミを日本に輸入してたりもしてたんで、非常に身近に感じるんですが、日本は今この開けるの開けないのとやっているのが長良川河口堰と長崎の諫早の水門なんですが、韓国にはですね同じような食べ物の役所があると思うんですが、日本では農林水産省、書いて字の如く農業が一番、その次が林業で一番最後が水産業なんですが、韓国にはこういう食べ物関係の役所で序列というのか、コーストの様な、そういう序列がありますか。

(李根熹氏)

多分どこでも同じだと思うんですけど、韓国は農林水産の方は、今二つに分けてますね。海洋水産部、海を管理する部署と、農林部、農業だけを管理するというか、その形で分け

てるんですけど、海も少し絡んで助成をしています。ただ、農林部の方は、やっぱり農業、農民の立場で話してますから、農業用水に対して被害が出ない様に。それで水産の方はやっぱりあまり反対しないんですね。漁民の立場ですから。

(伊藤委員)

あと如何でしょうか。じゃあ、こちらの女性の方と、それからあと続いて後ろの男性の方をお願いします。

(傍聴者)

長良川の方について教えてもらいたいですけども。韓国の方で、

(伊藤委員)

折角なので最初にお名前だけでも教えて下さい。

(傍聴者)

名古屋市昭和区から来ました尾形といいます。韓国の方では短期対策として、1番で工業用水の取水源を上流に移転した、2番で農業用水の対策、水門改造、それから3番、4番というモニタリングというあったわけですが、同じようなことを長良川でもする必要があるのかどうかを教えてもらいたいのですが。

工業用水の移転というのは、この利水の表を見ると工業用水は全然使っていないので何もやらなくていいと。それから農業用水については先程の方の質問のように塩分が遡る支障はないだろうということなんでしょうかね。ということは、長良川の方では、塩水が遡る問題については、特に何もする必要はないんでしょうか、長良川の方で教えて欲しいんですけども。

(伊藤委員)

すいません。一応、私が利水チームの担当者なので、司会が生意気ですがちょっと続けて話させてもらいますと。まず農業用水のことについてみますと、まず確実に問題が出るだろうというのは愛知県の福原輪中地域は、これはゲートを開ければ、川底を掘っている分だけ塩水が上がっていきますので、従来型のアオ取水でいいのかまた地下水等他の水源をするべきか、議論を今、愛知県の委員会の方でさしてもらっています。

それが岐阜県の高須輪中地域まで行くかどうかというのは、ゼロとは言いません、多分一定程度、年に何回か遡上するとか、そういうのはあるだろうと。ただ、具体的なシミュレーションみたいなものは、ちゃんとゲートを上げてやってもいいんじゃないのかなと。もともと大きな被害が出るということは想定してません。

ただ、今、想定していませんというのは、他の立場の方から言えば、それが100%安

全でないでゲートは上げさせないという言葉にも繋がっており、そこをどういう風に調整させていただくかと。

まさに本来なら国家、国土交通省が真ん中に入っただいて調整しながら、ゲートを部分開放をやって、被害が出そうだったらすぐ閉めるとか、いろんなやり方があると思うんですけど、今のところ投げかけられているのは100%安全が確認されないで一切ゲートの部分開放でさえ認めないことを言われてますので、そこはシミュレーションを含めた何かもっとちゃんとやらなければいけないのか、できるのかというところで悩んでいるのが実態です。

都市用水に関して言えば、水道、工業用水ですけども、愛知県の方で水源を別に替えてやるという基本的な策は、これはちゃんと計算の上でやっています。で、三重県とも問題はないだろうということなんですけど、時々電話すると問題があると言われてしまうので、それは本来、三重県のスタッフの方、もしここにいたら是非、正式に一緒に委員会で議論させていただいて問題があるならあるということをやちゃんと詰めるような議論にしないと、愛知県の方で一生懸命大丈夫ですよ、こういう風にしたら大丈夫ですよと言っても多分信用出来ないということで終わっちゃうと思うんですね。

県境とか何とかの組織の分断を何とかしないと、なかなか議論が先に進まないかと、ちょっとすいませんお答え余分なこともしやべっちゃいましたけども。以上です。

じゃあ、続いて質問ありますでしょうか。大分時間限られてきましたので、様子を見ながらこれか、もう一つぐらいで終わらざるを得ません。よろしくお願いします。

(傍聴者)

石川県から来ました。河北潟というところで、今、環境の研究をやってますけど、高橋と申します。私たちの河北潟という所は干拓をした所で農業用水ということで淡水化した湖なんですけども、そこでの水門開放ということは今考えて、いろんな議論をしているんですが、韓国のナクトンガンにおいて水門開放をするうえで、漁民や環境団体の方が、この解放の要求をされたという話をいただきました。この時に、周辺の農民についてはどのような反応があったのかということなんです。

私たちの河北潟で言いますと水門を開けることによって農業被害というのがあるんじゃないかというのが、かなり行政を中心として言っていることなんです。ただ、地域の農家からすると、どちらかというと塩害よりも水がきれいになって欲しいという要求がありまして、今のところ農家は割と賛成してくださっているんですけども、韓国の方ではどうだったかのかなということでお伺いできればと思います。

(李根熹氏)

この発表をするときに地図を見ながら発表しましたが、ナクトンガンの周りは、平坦な平野地なので、いろんな田んぼとかが初めは多くあったんですね。それが、だんだん

都市化によって、団地とか空港も拡大しますので、いろんな農協もなくなりましたし、ただ先程話したように、西のナクトンガンという水門の所で、それを改造して上の方の塩分がない淡水をあふれるような形にすれば、まずは出来ると思いますね。それで、もっと15キロまで塩分が入っても、農水路を用いてもっと上から淡水が入れるような形で対策を模索しております。

一番重要なのは、やっぱり農民の方は、先程話したように、昔も多分堰を造る前も農業はやってたんですね、それは何かというとやっぱり淡水と海水が混合するんじゃなくて層が出来るんですね、この層の上の方は淡水で下の方は海水だから、上の方を用いて農業をやってたんですね。

ただ、韓国の方は4大江事業によってナクトンガン上流に8つのダム、それが出来て上の方で大量の水量がありますから、それを流せば十分これは対応できると思いますから、今は事情は良いと思いますね。

(傍聴者)

わかりました。農家からは特に反対というのは出てないということでしょうか。

(李根熹氏)

まだ、実際、大きな声は出さないですね。ただ、本当の被害が出れば、もちろん補償の問題も起こる可能性もありますけど、今は大きな声を出さない状態です。

(傍聴者)

ありがとうございました。

(伊藤委員)

はい、時間がきました。最後に簡単な質問でお願いできますか。

(傍聴者)

一宮から来ました岸野といいます。日本の姿勢と一番違うと思うのは、行政が非常に熱心だなということ。このスケジュールとか見ても思うんですけど、韓国の場合には、何ていうのか、一生懸命市民も巻き込んでやろうという行政の姿勢でしょうか。

(李根熹氏)

そうですね。多分違うのは、韓国の方はご存じのとおり87年から民主化運動で直接、大統領選挙になってまして、それで選ばれた市長や大統領は国民の代表なので、それを中心に仕事をするというか公務員も市長とかその指示に従って仕事をやるべきですね。そ

れが多分そうだし。それと市民団体も日本よりも声とか活発に活動するんだと思います。

市民というのは、結局は一般の市民は関心がないんだけど、一部の市民というのが、この声が市民を代表する声で、それで公務員とか市長の立場で、この声を重要にするということになっております。

(伊藤委員)

ありがとうございます。本来であればこれもう半日、一日かけて是非いろいろとやりたいんですけど、時間がないので、最後に武藤さん一言。日本の市民グループのリーダーとして。

(武藤仁氏)

私が一番初めナクトンガンの河口堰を見たとき、実は15年前だったかな。水道行政を視察する目的で釜山へ行ったときに、ナクトンガンに河口堰があるのを知って、で見たらさっき言われた1987年に完成と書いてあるんですよ。長良川河口堰は1988年に建設で大荒れの中で、95年に完成したんですけど、1987年といったら全斗煥政権の軍事政権の時代だったんです。その時にもう出来てたんです。

だから、反対運動の中で出来たこの長良川河口堰と、市民的な声がなかなか出せない中であんなでっかい河口堰の建設、2キロメートルですからね、長良川河口堰が660メートルですから、とてつもなく大きい。ナクトンガンも556キロでしたっけ、そうですね、長良川166キロですから、全然スケールが違うんです。長良川はすごいきれいです。ナクトンガンの水道の水源を見たら「これ飲むの？」と私は言いたいんですけど、だけどそこにはその良さがあって、この雄大なナクトンガン、そしてきれいな長良川。

それぞれの良さを見ながらその地域で守っていく、そしてこの河口堰をどうしていくかという議論を地域の歴史と地域の状況でお互いに情報交流しながらやっていきたいなというふうに思っています。

(伊藤委員)

はい、ありがとうございます。で、ここで小島先生が一言ということで。

(小島座長)

あの、最後の質問でね、韓国の住民運動って結構激しいんですよ。それが、選挙に影響する。つまり、選挙に影響するだけの力を市民運動が持っているということですよね。これは、僕も常々考えるんですけど、日本の市民運動が選挙になるとほとんど活動しない。

(伊藤委員)

それを言うと、大嘘になる。すごいやっています。やってるけど影響がなかなか出せない

だけ、すごいやっています。

(小島座長)

その成果が出ないということですね。韓国の場合は、何かそれが直結しちゃうぐらいの。

(伊藤委員)

あの落選運動とかやっていますから、落とせとか。

(小島座長)

大きいですよ。これは住民運動と政治の問題というのは、いろんな所にあるんですよ。常にそういうことを考えているというのが、いろんなちょっと選挙なんかを見て、そういうことが一つですね。

それからもう一つは、工業用水は長良川の水を使ってないんですけど、長良川河口堰が出来る前から農業用水を使っていたり、三重県の工業用水道を使っているんで、そっちへの配慮が必要なんです。多分、工業用水を使ってないから関係ないということではあるんですが、長良川河口堰の工業用水はゼロだけれども、その前から使っていた工業用水、これの配慮をしなければいけないし。それから農業用水については、本当に30キロまでのぼるのかというのは非常によく分からないから、それを確認するためにプチ開門をやりましょうということなんです。

農業からすると、本当に被害があるんだったら、その被害が起こらないように努力をしていたはずなんです。河口堰ができる前は。だから被害がなかったか、あるいは被害が最小限になっているはずなんです。今、アオ取水も、ちょっとセンサーって書いてあるんですけど、今、自動運転をしようという人工知能の時代ですよ。もはや。塩分センサーっていうのは、食品工業であるとか医療用器具の中で塩分のセンサーってものすごく発達しているわけですよ。だから、塩分のセンサーとポンプを結びつけてやるなどということは、日本の科学技術、IT技術を使えば、すぐにできることなんです。これは食品工業のロボットの所に聞けば、すぐにできますよ。と言われるに決まっているんです。僕、ちょっと聞いてみたんです。何を言っているんですか、小島さん。日本のIT技術はね、そんな初歩的な話をやっているわけではありませんよ。だから、アオ取水というのは昔の人ですが、今や人工知能の時代ですからね、それを使えば、ある意味では、注文していただければ、すぐに作ります。っていうぐらいの。そういう時代なので、時代が変わっていますので、いろんな問題は、科学技術で解決できるものがあるということをおきたいと思えます。

(伊藤委員)

終わります。どうもすいません。ちょっと伸びましたけれども休憩はさんで第2部の方へいきたいと思えます。ありがとうございました。

(原田委員)

ありがとうございました。伊藤先生ありがとうございました。李さん、そして小島さん、武藤さんありがとうございました。

さあ、これから10分間の休憩とらせていただきます。李さんは最後までいらっしゃいます。まだ、質問ある方は最後の最後まで居ていただきますと李さんには少しまた、お声を出していただきたいなと思っております。ありがとうございます。

はい。それでは20分まで、ちょっと20分よりも少し早めに再開をしたいと思います。5分にしようかな、休憩時間。今日はたくさんの方おみえですので10分休憩しっかりとりたいと思います。

今日はですね、アンケートの方も皆さんのお手元にあるかと思います。是非、アンケートの方、最後には書いていただきましてスタッフの方にお渡しいただくといいと思います。アンケートのご協力お願いいたします。

それからですね、今日、パネルの展示もしてございます。後ろの方にですね、長良川の清流のパネルの展示など。そして愛知県、岐阜県の観光のパネルが展示されてますのでお願いをいたします。

はい、それでは10分後によろしくお願いいたします。

(休憩) 15:12～15:22

(原田委員)

さて、皆様。お待たせをいたしました。第2部に入りたいと思います。こちらにゲストのお二方登壇をいただいております。ご紹介をさせていただきます。

今回ですね、ワイワイ談義を第2部で始めますけど、その前にですね、お二人に川漁師と伝統漁法をテーマにお話をいただきます。

写真家でいらっしゃいます、まずはですね、磯貝政司さんですね。どうぞよろしく願いをいたします。長良川の写真をご紹介していただきます。

そして、漁師でいらっしゃいます。長良川で専門に漁師をしていらっしゃいます。この当委員会委員でいらっしゃいます大橋亮一さんお願いをいたします。おなじみの顔ですね。

それでは今からお二人で映像とともにお話の方進めていただきます。よろしく願いいたします。

(磯貝政司氏)

ただいま、紹介いただきました磯貝でございます。私みたいな、場違いな、写真家と書いてますけどアマチュアでございます。好きで好きで写真を撮ってまして、主に木曾三川を撮ってまいりましたけど、だんだん長良川が好きになりまして、河口堰ができる前から

ずっと長良川を撮ってまいりました。

今回ちょっとその写真を議論したいという申し出がありましたので、場違いで本当に、学者とか先生方と一緒にこんなところに出るのは。大変失礼なことかもしれませんけれども、私の写真を説明しながら、ここにおられます大橋亮一さん、長良川一の漁師さんです。この方といろいろとお話ししながら、写真を上流から河口まで、途中、大橋さんの漁の写真を交えて、説明をしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

なお、私は帽子を被っていますけど、私いつも写真を撮りに行くときはこういう格好でありますので、その辺の流域でお会いしましたら、必ずこういう格好でありますので、今日は帽子を被ったまま、相棒がいないと寂しいですので、そういうことで失礼をいたします。よろしく願いいたします。

これ大橋さんわかりますか。何の写真か。

(大橋委員)

何ですか。この写真は。

(磯貝政司氏)

長良川の最初の一滴です。ここから長良川が生まれております。御存知のとおり長良川は、大日ヶ岳を源に、ずっと岐阜県を貫流しまして、伊勢湾に注いでいるわけですが、そのだいたい9合目あたりですね、最初の一滴を撮るために、私は下から、そうですね車を降りてから6、7時間くらい歩いてたどり着いた最初の一滴です。

いくら源流の一滴といいましても、日に日に変わります。雨が降れば、上流にもっと上がりますし、雨が降らなければもうちょっと下流になりますもんで、何月何日の長良川の最初の一滴というのが、正しいことだと思うんですけど、今回は省略させていただきます。これが長良川の始まりです。

これが、先ほどの一滴から約2時間くらい下りますと、大日ヶ岳のブナ林があります。上の方の樹種は、全部ブナです。ブナのちょうど根元から、水が噴き出しています。本当に見事なところですよ。これが長良川の本当の源流域だなあと私は思うんですけども、下の方の流れを見ていただくとわかると思うんですけども、本当に水滴ではなくて流れとなって噴き出しています。この下で長良川の前ほどの一滴がずっと流れ下ってきた吠谷と合流しております。はい、次をお願いします。

これが、しばらく下ってひるがのまで来たところですけども、分水嶺とよく言いますが、なかなか分水嶺という所は見えないんですよ。日本の各山を回っても、そうとう奥深くに入らないと見えないんですけども、この長良川は本当に車で降りればすぐここです。ひるがのの高原のちょうど一番高いところにあります。左側の流れが太平洋で、右側の流れが、庄川となって日本海に注いでおります。本当にこういう風景というのは、人と川のつながりが大変身近にあるなというふうに私は思っております。はい、次をお願いいたします。

ます。

これは、先ほどの吠谷がだんだんひとつふたつと川が合流して、これが少し大きくなった長良川の上流域です。手前が上流で、上の方が下流です。その水を利用して水田で田植えをしている風景です。長良川の本当にきれいな水を使って、さぞかしお米が取れているなあと、そんな感じがします。

なお、今回の写真ですけど、一枚を除いて私がセレクトしたものではないです。今日の関係者の方々が、選んでくれた写真ですので、私が選んだ写真ではないことをお断りしておきますけども、やはり、好きな写真は、皆さん好きな写真ですね。それを思います。長良川は、本当に、川とそれから人とあるいは生き物とのつながりが深い川だなあとということを本当に感じます。はい、次をお願いいたします。

これはまたそこから、しばらく下って、川の太さを見ればよくおわかりいただけると思いますけども、だいぶ下流に下って、大和か、郡上市大和か、白鳥あたりの風景ですね。秋のちょうど刈り入れが終わって、野焼きをしている煙が、ちょうど橋の上を、長良川鉄道が、通っていますよね。これも本当に長良川が、里とつながりの深い川だなと、里川という言葉が私は好きですけども、長良川は日本を代表する里川だなと、そんな風に思っております。これもだいぶ好きな方がおられました。はいその次をお願いします。

これは、さらに下って郡上市ですね、郡上八幡、あの踊りで有名な八幡の吉田川です。この川はちょうど町の中心の所です。ちょっと写真はカットされていますけれども、この写真は皆さん本当に好きですね。私も好きですけども、後で説明をしますけども、国交省も好きです。国交省もこの写真を使っております。しかも、カットしてですね、また後で、お見せする機会があったら、ワイワイ談義のところでお見せしてもいいんですけども。飛び込むとこだけをやっていますよ。私はもっと広く撮ってるんですよ。私らの世代の人はわかると思うんですけど、こういうのが普通の川だったんですからね。それが今は本当になんか川で遊ぶとか遊泳禁止という立て札があちこちにあって、川と人との距離が遠くなっているなあと思うんですけども、長良川はまだ、本当にこういう風景が上流に行けば見ることができますので、大変貴重な川だと思います。次をお願いいたします。

これは今のところ、今が吉田川ですけども、吉田川と長良川の本流が、ちょうど合流するあたりで、漁師さんが投網漁をしているんですけど、大橋さん、何という漁ですか。

(大橋委員)

これは、投網やないですか。アユを捕る目的やと思います。

(磯貝政司氏)

上手い方ですよ。網を投げるのが上手い方ですよ。

(大橋委員)

まあ、丸う広がるとで、上手やがな。ドボーンと放り込んだばっかやで。

(磯貝政司氏)

私も、実は何十枚も撮ったうちの一枚です。本当にこういう形になるのは、なかなかないですね。私が撮ったときは、デジタルではなくてフィルムですので、すぐ現場ではわからないんですよ。だから、多分撮れているだろうなと思って、それで帰ってきたら、数十枚のうち一枚がこれだったと。やっぱりデジタルもいいですけど、そういう昔のフィルムの時代もいろいろ想像力を高めて、面白いなと思います。はい、次お願いします。

これは、私が唯一セレクトでお願いした一枚です。これは、長良川の鵜飼いをやる所の河原です。本当に県庁都市・岐阜市のど真ん中を流れていても水浴できるということは本当に素晴らしい川です。

環境省の日本の水浴場55選の一つに選ばれているんですけども、ただ一つ川で選ばれているんですね。残りは海です。海水浴場です。それだけに、この長良川というのは、本当にすごいきれいで、本当にこういう水浴が、しかも県庁都市のど真ん中で、できるということが素晴らしい、本当に里の川だと思っておりまして、この一枚を私が無理を言って、お願いして、皆様に見ていただいた次第です。はい、次をお願いします。

ここは、今の水浴場の、ちょこっと上流ですけども、ここにおられます大橋漁師さんの漁協の区域でございます。

(大橋委員)

はい。あのね、アユが産卵をするために、上流から河口へ下るやつを、川いって、川底に白いビニールを敷いて、上は、鉄筋が10メートルおきに打ってあると思います。それにロープがかけてある。それで水の流れて、いっぱいロープが下に下がるとピチャッ、ピチャッと縄跳びのように水面をたたくので、下にはビニールが敷いてありますし、上は水面をたたくので、アユがびっくりして、そこで止まるやつを、投げ網で取るんです。これは秋の漁法です。

(磯貝政司氏)

じゃあ、落ち鮎ですね。

(大橋委員)

そうです。

(磯貝政司氏)

はい、次をお願いします。また、ちょっと戻ります。長良川は本当に日本を代表する川

という理由のひとつにですね、大変、魚とか生物の種類が多いですね、日本で一番多いと言われています。これは、郡上市の亀尾島川という支流では一番きれいな川ですけども、この川で撮った魚です。これくらい魚が泳いでいましたと、今は、言わざるを得ないんですけども。次、お願いできますか。

これも同じ亀尾島川ですけども、この深さはですね、約5メートルくらいあるんですけども、本当にきれいで、川の底まで見えます。これが、泳いでいるのがサツキマス。

(大橋委員)

磯貝さん、これ今、写っているのは、魚の影が映っているのはサツキマスですか。

(磯貝政司氏)

これ全部サツキマスです。サツキマスがこんなにいるというのはですね、私もここに何回か撮影に通いましたが、本当にウヨウヨしているという感じです。1990年代ですけども、長良川のシンボル魚種と言えば、サツキマスですけども、それだけ泳いでました・・と言わざるを得ません。というのは、この亀尾島川の上ですね、今、ダムの工事が始まりまして、その土砂とかが流れてきて、この淵は全部埋まってしまいました。もう本当になくなりました。サツキマスの産卵場が、この淵のすぐ下にあったんですけども、それもなくなりました。この淵の上を今度は橋が架かりまして、トンネルができて、この淵は全く面影がありません。本当にサツキマスが生息する場所が少なくなりまして、亀尾島川も本当に美しい川ではなくなりつつあります。大変私は心配しております。

(大橋委員)

よろしいですか。ちょこっと付け加えて。このサツキマスという魚はねえ。アユは、どこで生まれても、どこの川へでも来るけど、このサツキマスというのは、自分の生まれた川しか帰ってこない。サケは、全部の海へ行くけど、このサツキマスというのは、この谷で仮に兄弟100匹生まれたとすると、100匹、谷におる時は、餌がねえわね、大きくなってくると、餌がねえで、一年経つと、みんなここに一緒におると、餌がないで死んでしまならんで、海に行けへんか、ほんなら僕も連れてってくれ、私も連れてってくれ。というふうで、ほんで海へ行って、そして、だいたい11月くらいに海に行くと、谷におると餌がないでね、なんべんでも言うけどね。春になると5月になると、海の水温が20度を超すとおれんと。まあ、帰ってこようかや、と行って帰ってきて。

岐阜県に水族館のアクア・トトというところがあるわね。あそこで飼ってみえるが、5月から12月まで産卵するまで、餌をなんにも食わんと。ほんでやっぱ、餌、食ったら谷におる先輩達死んでまうんで、餌を食わんと。産卵をしたらほんで終わりやて。そういつて、水族館の先生方がおっしゃるが、何にも食べんぞよと、ということだね。

また、私達が若い時に、岐阜県には水産庁はございません。岐阜県には海がない。水産

庁がないで、私のところへ三重県から来る年も来る年も私たちの漁場へ来て、こんな遠い所へこんでも、河口堰のないときやで。もっと下流でサツキマス漁みたい漁師でとつとるのいくらでもおるがやと、私が言ったら、ここまで来ないと生きとらんと。下流の漁師はみんな網にかけるなり殺してまうで。ここまで来ると生きとるでってね。ほんでそういうことでみえて、魚買ってから石を取ったり何かして、岐阜の長良川のサツキマスには何にも虫はおらんぞよと。刺身にして食ってもええぞよ。何でおらんのだと私が逆に尋ねたら、秋下って春上ってまうと。海に水温が高なってからおらんで。ほんで虫はおりませんと言っでね。三重県の水産庁がそういっておっしゃった事、今、私よう忘れんが。そのくらい郷土思いというか、自分の生まれた川へ帰ってくる。

私は、いつも子供らに、仕事で学校いくと教えてやるとね、とにかくどこの学校行ってもええで帰ってよ地元へ。魚でさえ帰ってくんだよ。そんで、地元を良くしてやってくれと。それで、鮎は阿呆やでどこでも行ってまう。そして気性も、人間で言うと鮎は気の短い魚やと。何でやと言ったら、自分の縄張りによその奴が来たら喧嘩して、そんで友釣りにかかる。

そういうことで、魚でさえ帰ってくるんだから、絶対遠いところに行っても帰ってきて地元をようしたってくだせえと言っで、子供らにもお話しとるけどね。それが、今日、会を開いていただいた、変なものが出来てから段々段々減ってきてまっであんだ。鮎。

この頃、河口堰だと言わせん人が見えるようになって。人工横断構造物やと。そういっでおっしゃるようになって。本当に減りました。本当に絶滅の手前です。それはどういうこっちゃいうと、上ってくる魚道はあるけど、下ってく魚道はないわね。鮎と違って、だいたい下ってくるときに20センチくらいになつとるでね、大きさが、一年経つとるでね。一年経ったやつが下ってくるから。ちょこつと知恵ついとってね、鮎と違って。

鮎はまだ1センチにもなつとらんようなやつやからええけども。知恵が付いとるでね、大きく魚道がないであかんのかなと。放流するのは、その河口堰の下で放流してるけど、これもちょつとも帰ってこないようになったし。本当に減りました。

私いた頃、河口堰ないときはシーズンに1200~1300匹獲ってたやつが今年は48匹です。そのぐらいおらんようになってました。ということです。

鮎はどこの川からも来るで減らんけど、これだけは、何べんでも申し上げますけど、自分の生まれた川しか帰ってこない。そういう貴重な魚ですけど、本当におらんようになりました。そして、値段も川で一番魚の中で高いです。値段も。ということです。どうもすみません。

(磯貝政司氏)

ありがとうございます。この魚は何ですか。

(大橋委員)

私ね、これを皆さんは魚に見えるやろうけど、私は一万円札に見えるで。そんで、逃げてくとあかんで、必死になつとるやろう。鮎の一匹、二匹逃げたってね、あ、逃げたというだけやけど。必死。必死になつてね。私には一万円札に見えます。

(磯貝政司氏)

そうですね。立場が違ふとそういう風に見えるんですね。これも本当に、大橋さんにご無理を言ひまして、船に乗せていただいて、中々撮れない写真だったんですけど。お札2枚に見えるんですね。向こうもそうですね。

(大橋委員)

はい2匹あれ、サツキマスばかりです。

(原田委員)

このお札はどっちのお札ですか。

(磯貝政司氏)

失礼しました。これは、先程の水浴場。岐阜市のありましたですね。そこからどれくらい下っていますかね。大橋さんのこの船で。

(大橋委員)

この網を投げたところは36キロ地点です。

(磯貝政司氏)

河口から36キロ地点です。じゃ次お願いします。

これは、大橋さん説明してください。大橋さんご存じの通り、兄弟漁師です。お兄さんがここにおられる亮一さん。弟さんが向こうの青いジャージを着てます修さんです。

(大橋委員)

弟が体操の服着て、私こちらで、二人でやっとしてね。昼間は、普通は私だけ、一人でやっております。夜は弟が一晩中やります。一番よつけ獲った時、昼間はどうしてもね、網の目が魚に見えるで、魚は、命がでえじかね、どうしても昼はとれんけど、夜は網に向かったやつは全滅やけども。昼間は、細い糸を使えや破つてまうしね、破られてまうし。

夕方6時頃になると、私に兄弟同士やで、あんやーといって。私んたらの方言で、あんやーというでね、兄貴のことを。私に、あんやーどうやったといって、昼間これこれを10匹なら10匹捕まえたぞーと言って。ほうと、今晚居るなーと言ってね。朝までやって

くれて、一番よく捕まえてくれた時が、朝までで98匹。それが私んたのサツキマス漁や
るようになってからの漁獲です。夜と昼とで、139匹とった。

無論、それだけとれたのは河口堰がねえときの話です。そういうことで、たくさんとれ
ました。現在の写つとる川は、ちょっと雨が降って、増水してこのときは河口堰がねえと
きです。以上です。

(磯貝政司氏)

これは、網のゴミ落としをしているところですね。

(大橋委員)

これね、ひとかわ網を流してきて、戻ってきて次の準備をしるところです。以上です。

(磯貝政司氏)

これは大橋さんの漁です。大橋さんにバトンタッチします。

(大橋委員)

これ、モクズガニの漁です。蟹漁です。この蟹はね、やっぱ秋になると、9月頃から海
に産卵するために下ってきます。卵もたくさん持って本当においしい蟹ですが、それも、
私らばっかやない、漁師はたくさんおりますので、みなさん入れるけど。やっぱ、通る道
があります。下っていく道が。私たち、友達にも言うんやけど、人間やっただって入りにくい
レストランと入りやすい店があるやろうがやと。やっぱ入りやすいレストランとこを入れ
とかなかんがやと。入りにくいとはあかんぞよとって。

まあ、一生懸命冗談も言っとったけどね、段々、みんな取れんもんやで、やめてまって。
これも河口堰から上ってくる、大体2月かそこらになると、私たあーの36キロ地点を1
円玉くらいの大ききで上ってきます。1円玉。学者の先生に聞いたら、大体5年から7年
川で生活をして、早いやつは5年くらい、遅いやつは7年くらいで必ず海で産卵する。こ
のモクズガニは。と言う事でね、これも、ゲートが出来てから本当に減りました。このモ
クズガニ。そういうことで以上です。

(磯貝政司氏)

ここからまた、長良川の写真に変わります。大橋さんはこの川の上流で漁をしておりま
す。これはですね。千本松原ですね。千本松原の春祭りの様子です。まだ河口堰ができる
前ですもんで、まだ砂浜があつて、お神輿がこうわっせわっせとこう砂浜、川の中入って
ずーっと、本当に賑やかなお祭りだったですけども。今はもう全面湖になりましたもんで、
ただ、堤防の上を歩くだけのお祭りになってしまいました。はい次お願いします。

これは河口に本当に近い赤須賀漁港のシジミ漁の出港風景です。シジミ漁は場取りが大

切ですもんで。よーいドンの合図で一斉に自分の一番いい漁場目指してエンジン全開でまっしぐらに進む雄大な風景です。今は見られません。聞くところによると今は2、3隻が多いときの数じゃないかなって言われています。ほとんどの方がなんかハマグリ漁に変わってしまったそうです。次お願いします。

最後の写真になります。これはパンフレットにもここにありますように木曾三川が伊勢湾に注ぐ情景です。夜明けの木曾三川で真ん中を流れているのが長良川です。鉄橋がありますけども、一番真ん中に中洲がありますね、あそこのところに河口堰が出来たんです。あその真ん中の中洲をきれいに取り除いて人工横断物というんですか。それが出来たんです。本当にさびしい風景です。だから今まで大橋さんたちの漁場の上流は本当に里川ですけど大橋さんの漁場から下流は本当に里の川じゃないです。本当に人と川との共生が出来ていない本当にさびしい川です。

岐阜県がさかんに里川という言葉メッセージとして発信していますが、本当の里川にするんだったらこの人工横断物を取り除いてこういう風景になれば本当の里川になり、日本を代表する里川になると思います。そういうことを祈って私は最後の写真にこの1枚を提示させていただきました。ありがとうございました。

(原田委員)

お二人に拍手をお願いします。素敵な写真とトークをありがとうございます。さてここからは再びお二人にも参加いただきまして、ワイワイ談義ということで最後のコーナーに移らせて頂きます。少し机のほう移動させていただきます。

大橋さんちょっとあのお待ちいただきまして今度上のほうに上がっていただきますね。すいません。今日も大橋節が楽しく展開をされて、また、この後も今からそうですね40分くらい時間を掛けまして、ワイワイ談義とさせていただこうと思っております。

今日はたくさんの方のゲストの方がお集まりいただきまして1部と2部に亘ってお届けしておりますけれども、李さんまだいてくださってますのでね、最後にまた質問ありましたら、あのご意見いただこうかなと思っておりますので、みなさんも質問を考えてください。大橋さんこちらです。大橋さんまだお役が、はい、お願いしますね。

ここからはですね、今まで大橋さんと磯貝さんとお二人に加えてですね、新たに登壇をお願いいたしますのが、秋山雄司さんです。秋山さんお願いいたします。秋山さんは元天竜川の漁協組合の組合長さんでいらっしゃいます。現在は顧問をお勤めでいらっしゃるといことで、秋山さんには是非、天竜川での事例のお話をさせていただこうと思います。

そして私たち委員の中から山本敏哉委員と蔵治光一郎委員をお願いしております。お願いいたします。蔵治委員はご存じのとおり森のお話、水のお話を、そして山本委員は矢作川で研究をされておられますので、そういった矢作川の事例を話させていただこうと思います。

それではまずここからですね秋山さんに自己紹介を含めて今日のご感想でもいいですし、

今回はその長良川のお話もありました、天竜川と比べてお話を少しいただきたいと思いません。お願いいたします。

(秋山雄司氏)

秋山です。よろしく申し上げます。あの一、お隣に大橋さんいらっしゃいますけども、僕らから見ると全く素晴らしいと思います。全国的に見て専門の天然ものを相手にこれだけやっつけていらっしゃる漁師っていうのはもう多分十本指かなというふうに感じますね。そういう点では絶滅危惧種でもあるけれども、どうしてもこの存在、この技をね、次の世代に伝えていくことが大事で、映像を含めたそういう形の伝え方もあるかなと、ひとつ感じています。

私の所属する天竜川、静岡県ですけれども諏訪湖から発しまして700数キロ下ります。天竜川っていうのはものすごく特徴的ですし、諏訪湖が一番汚い。最上流が。さっきの一滴という表現されましたけれども、何トンという水量がどっと流れています。匂います夏はね。だいぶきれいになってきました諏訪湖。そういうところで、一番今の問題点というのは、5つダムが本流にあります。このダムの影響から来る河川環境の変化。これによってアユが猛烈な減り方をしていると、いうふうに思います。

ちょっと具体的に数字をあげます。私たちの組合が最高時1981年に組合員が3,469人、これ覚えておいてくださいね。今、1,589人です。この減り方ってすごいですよね。これだけ減っています。遊漁証ってありますね。川に入るときにお金を払って入るあの例のやつですけども。これが最高時、これも81年ですけども、24,315枚売っていました。それが今年ですけども、1,766枚です、今年の年券ですね。組合員数が1,589人こういう数字です。こういう減り方をしています。年券というか遊漁証から行くと7.2%になってしまったという、全く恐るべき数字ですよ。

こういう状態の中でなんで経営ができるかということですけども、実はダムのおかげ。電力会社からのいろんな形のお金が漁協の運用を支えている、というところがひとつあります。まったく痛し痒しですね。大きな声で環境問題、こぶしを上げてやりたい、しかし、巾着握られているんですね。こういう苦しさがあります。これが客観的な現状ですね。

これで苦しい苦しいと言っていちゃいかんですけども、天竜川はこれに負けずにですね、天竜のことを知ってもらおうということで、私の在任中のあだなはイベント組合長でした。もうあらゆる時期にイベントを一生懸命やって、子供から年寄りまで含めて多くの方の参加をしていただいております。これが概要ですね。

あとはみなさん漁師っていうのはどんだけいるかっていうことになりますけども、これは全国内水面漁業連合会を出している数字ですが。漁協数、平成7年ですけども793、その次が813(H8)ぐらいです。これが最高時ぐらいです。いまは763(H28)そんな減っていませんでしょう。ここ深く考える必要があると思います。必死の思いで支えている川、釣りが好きな人たちがいるなということが、ここの数字から浮かんできます。

組合員数です。最高時が 46 万 2,018 名 (H8)。現在です。25 万 4,536 名 (H28)。これだけ減っています。半分ですね。これが日本全国の現状です。これでちょっと一度切りますね。

(原田委員)

今の現状をお伝え頂いておりました。それではですね、山本委員にお願いをいたしたいと思います。矢作川の様子を教えてください。

(山本委員)

はい、矢作川研究所の主任研究員をしております山本敏哉と申します。矢作川ですけども長良川の長さが 166 キロに対して矢作川は 118 キロ、3分の2ぐらいの長さですが、流域面積でいくと長良川 1,985 平方キロメートルに対して 1,830 平方キロメートルとほぼほぼ同じぐらいの流域面積を持つ川であります。

我々も矢作川ではアユをですね一つのシンボルにしてアユの環境を守るための研究を手掛けてきております。今年ですね実は矢作川、我々が調査を開始して 20 年近く経つんですが、もっともたくさんのアユの遡上数を記録しまして、河口から 35 キロの地点ですので、中流近くのところのカウントしているんですが 1,000 万匹をちょっと超えて 1,003 万匹ですか、遡上数を誇りました。

多摩川でですね 1,000 万上ったという大きなニュースになるんですが、我々も 1,000 万上ったという結構ニュースなんですが、中流で 1,000 万ということは下流まで含めると 2,000 万、もうちょっと矢作川に天然アユが来たのかなと思っております。

これも多分ですね大橋さん言われたように、結構アユっていいかげんな魚でして、ひょっとしたら矢作川で生まれたアユじゃないのが大部分を賄っているかもしれないなあ、と思っていつも言っております。というのは、その前の年に生まれる矢作川の子供の数ですね、これも調査しているのですが、隣の豊川とかと比べるとやっぱり 3分の1、多くて 2分の1ぐらいの数しか下っていないんですね。矢作川って豊川よりも規模は倍くらい大きいんですけども、少ない数。あるいは矢作川の近くをとということでは地図を見るとですね。三重県の宮川なんかは河口の距離でいうとそう遠くない距離なんですよ。あと木曾三川ということもありますし、そういった川に助けられてこの矢作川の天然アユ遡上数というのが支えられているかもしれないなと思っています。

そういうのもですね、先ほど天竜川の事例、秋山さんが言われたように、我々も本流には既に 7 つものダムがあります。魚道があるのでそこそこアユは上れるとこなんですけども、下ることがですね、長良川河口堰の問題でも触れられましたが、非常に大きな問題で、恐らくまともにアユも下れていないなと思いますし、大橋さん言われたようなサツキマスに至っては、もう絶滅に近いようなことかな、存在かなと思います。サツキマスだけを釣りに来ている人もいるのですが、夢を釣りに来るような釣り師でして、一匹釣れたら万々

歳の釣りだということで、されている人が何人かおられます。このサツキマスの調査我々5年くらい前までダムの魚道に上ってくる数を数えてました。少ない時で0ですか。多い時で10匹ぐらい矢作川でも上ってきてまして、これどこから来るのだらうと想像しているんですが、もう産卵場所なんかいないような川なので、サケのように母川回帰で生まれた川に上ってくるのを間違えて、ひょっとしたら長良川から上ってくるのかなとも想像していました。標識放流ですね20センチくらいのサツキマスを銀毛したアユをひれカットして放流するようなこと10年くらいやったんですが、10年間やって1匹しかとれていないんですね。なかなか種苗放流の効果もないですし、そうじゃなくて、ひれカットしていない天然のサツキマスがポツポツととれるということで、近隣の河川に助けられている川なのかなと思っております。

ですので、長良川はこのあたりで言えば本当に自然豊かな川でダムも少ない川ですので、是非とも環境面でも我々を引っ張っていくトップワンの川で、今後、行ってほしいなと思っております。簡単ですが少し紹介させていただきました。

(原田委員)

面白いですね。川の近隣の川同士でこういったお話ができるというのも。はい、その近隣の川がもしかしたら森は一つのところから発しているのかなというような考えはどうでしょうか。蔵治先生お願いいたします。

(蔵治委員)

はい、東京大学に属している蔵治と申します。この長良川河口堰に関しては先ほど小島さんから紹介がありました冒頭からプロジェクトチームと言っていたときからずっと参加をさせていただいております。

私は、この長良川河口堰の議論の中では利水チームということをやっているんですけども、どうして私が利水チームをやっているかということ、今、紹介があったように私は森林の専門で、その森林からどのように雨水が集まって川となるかということに専門にしています。

利水というのは水資源を取り扱っていますが、水資源というのはもともとは全て源流の山に降った雨が、一滴一滴、山から湧き出て集まって川になって私たちが使える水資源になっているわけですね。ですので、私たちがどれだけの水資源が使えるかというのは、まさに山にどれだけ雨が降っているかと、その傾向が昔から今までどう変わったかと、それから山には森がありますので、森の様子も今と昔では違いますので、その森の様子が変わることによって、降ってきた雨が川に流れるときに、また、どういうふうに変わってきたかということがすごく大事になるんですね。そのために、私は利水チームというところでやってきました。

そうなんですけど、今日はワイワイ談義で川漁師と伝統漁法のところでお話すること

になりましたので、その専門的な話はちょっと置いときまして、ちょっと雑談的にお話しますと、先ほど磯貝さんに大変きれいな写真いっぱい見せて頂いて、その最初ちゃんと源流の一滴から初めていただいて本当にうれしかったです。

その後、サツキマスの漁の写真が出てきてあれが1万円札に見えるっていう話があったんですが、それを聞いて私が何を思ったかと言いますとですね。私ども森林林業木材生産を担当している者です、みなさん山に行くと木が生えているなと思うかもしれないですけど、木材業界の人たちは札束が生えているというふうに思うんですよ。その木が切られる前に大きくなって枯れてたりすると、まあなんともったいないと。早く切って出しておけばよかったのにつて。

そういう話をするので、それを思い出したわけなんです。実は、山で林業、木材生産という、まさに山の生業ですね、その生業というのは川で魚を取る生業と同じように日本文化の根本中の根本として、もう2000年も前からずっと私たちがやり続けてきたことなわけです。だけれども、今その川で漁をするということが絶滅危惧になりつつあるのと同じように、山で木を切ってそれを使うということもですね、どうやら同じような運命を歩むんじゃないかなという心配が正直あります。

だから、それだけやはり山で仕事をするということは非常にきつい仕事で、しかもあんまり儲けにならないとなると、その今の若い人たちがそれをやるかどうかということになっちゃうんですね。今の若い人たちは、おそらくもう冷房の効いた部屋で一日過ごして給料をもらう方がずっと楽しいと、どうしても思っちゃうようなところがあります。

ですので、その川漁師の方々のお話を聞いていると非常に共通する第一次産業として共通するものはあるなあということはずごく思うところです。やっぱり、山で働く人がいなくなったら、もちろんそれはやっぱり川にも大きな影響があるだろうと思いますので、是非そのこれからの山川海という繋がりという中で、河口堰の話も、その三つの繋がりを考えながらやらないといけないなと思いました。

もう一つちょっと申し上げたいんですけど、それは、私と秋山さんの関わりのことについて。それは何かといいますと、私、東京大学の教員なものですから東京大学の学生を教育するのが仕事です。東京大学の学生に山川海ということを教えたいと思っておりまして、そういうプログラムをカリキュラムを作って東京大学の1年生2年生理科系文科系を問わず募集して、ちゃんと単位をあげるよということで2泊3日のツアーをやっています。

そのツアーのどの川がいいかなということを選べるわけなんですけど、これまでは天竜川で実はやってきております。長良川でもやってもよかったんですけども、天竜川を選ばせてもらっていて天竜川は本当に学ぶことがいろいろ多い川だと思っています。

その中で、上流から下流まで見るんですけど、中流である川のことを一番昔から今までよく知っている人に学生の前でお話しをしてほしいと私はずっと思っていて、そういう人はどこに居るのかということですね。それはおそらく、その川を管理している浜松国道河川事務所の方とかではないわけですよ。そういう方に頼んでもですね、そういう方は

法律に基づいて淡々と事業をやっております、という説明は、非常に完璧にされるわけなんですけど。多分それでは、学生の教育としては、というふうに思っていて、実は天竜川漁協さんに毎年、実はお願いしております、毎年2月の最後の日曜日に、日曜日にも関わらずですね、厚かましくお邪魔させていただいて、天竜川の話をしていただいているんですけども。その縁で本当に秋山さんにはお世話になっているんですが。本当に学生は何も知らないんですよ、これが。まず学生は内水面漁業という単語を聞いて目が点になるわけですよ。生まれて初めて聞く言葉になってますから。次に学生がイメージするのは、内水面漁業というからには、大橋さんみたいに、川で魚をとって、それで商売して、専業でやってる漁師さんの集団だろうと、まず思うわけですね。ところが、秋山さんの話を聞くと、全く目が点になるわけですよ。そういう人は、ほとんどもういなくて、釣りを楽しむレジャーをされる方がほとんどです、という話から始まるので。ですので、本当に秋山さんも地元では、環境教育というか、子供さん達への教育もすごい取り組まれているんですけども、今、私たちが、ここですことはですね、すべきことは、どう次の世代にこういうことを、川の守り人としての、川を一番よく知っている人としての、釣りをする人たちですね、別に専業じゃなくても良いと思うんですが、そういう人たちをいかに繋いでいけるかということで、それが繋がらないと、本当に、誰も川について知らない、という時代が来ちゃうと思うんですよ。それは、すごい怖いことだな、とっていて、そういう意味で、内水面漁業の関係者の方々は本当に頑張っていて欲しいなというふうに、毎年毎年思って、学生の教育にあたっております。だから、秋山さんに、是非、その辺のお話もここで少し捕捉とかして頂ければと思いますけども。

(原田委員)

秋山さんお願いします。東大の優秀な学生さん達が、秋山さんのところにお越しになって、お話をするというのはどんなお気持ちと想いを伝えてらっしゃるのでしょうか。

(秋山雄司氏)

あの、激烈な入試試験勝ち抜いてですね、すごい優秀な方が30名くらいいるわけですよ、男性、女性集めてね。下手なことしゃべれんと思ったんですよ始めは。ところが、何にも知らない。やっぱり、現実をまず知らせる。なんで、内水面漁業の存在意義があるか。これはですね、良かれ悪かれ内水面漁業の組合員は、12ヶ月間いろんな形で、魚を追かけてるわけ、ウナギもカニもいますけど。川を監視しているんです。監視イコール管理です。本人達は全然意識してないですが。けども、そういう目が届く川が自分の身の回りにあり、流域にあると言うことが、営営として何十年も続いて来とるわけですね。ここに存在意義があるんじゃないかなと思います。

ダム補償でね、金いっぱい貰っちゃって、白物いっぱい買って大騒ぎしたっていうのはいっぱいあるんですそんな話は。ごめんなさいね、

しかし、まともにやってる人たちが圧倒的ですから。川を愛して、子供たちに、あるいは嫁さんに、自家消費で獲った魚を食べさせるっていうごくささやかなね、取り組みをやってらっしゃる組合員っていっぱいいるんですね。こういう組合のことを学生さんに伝えるわけですよ。同時に学生さんに、あんた達多分偉くなるんだろうと。行政入れば官僚で、局長くらいまで行くんじゃないかと、そういう時に、川をどう見るか。ここに大事などこありますよってお話しします。開発の代償だけではなくて、そこで、生活して、楽しんで、苦しんでる人たちがいるよと。その時に思い出してねこの話とお話しています。

(原田委員)

すごい実体験からのお話でね、一番の身になる勉強ですよ。あの、先程の森もお魚も札束に見えるということは、実は、ヒントなんじゃないかなと思うんですよ。やっぱりあの経済を動かしていくに値するものが自然の中の宝庫の中に詰まっている。なのにそれに気付かずにオフィスでお仕事ばかりしていて、では、本当の宝は見つけれないですよ。

そして絶滅危惧種がお隣にいらっすると。人間でも絶滅危惧種の職業があるということを知りましたが、大橋さん、絶滅危惧種と言われました、今日、大橋さんのことを。どんなふう実感されていますか。

(大橋委員)

あの、本当に今日こうやって皆さん寄ってくださりまして、本当に、今この皆さんの、この川魚を消費してくださる魚が、全部海、海から来る魚、全部河口堰にからんだ。あんた、川魚のほとんどの川魚やナマズやたらいくらでもおる。そんな近畿大学に頼まんでもいくらでも長良川におる。で、脂がようけのつとるで、おいしいやと、やので川でも一緒です。脂がのったやつとのつとらんやつがある。それと一緒に、ほんで、それをね、ナマズを、この、昔は高こう売れました。今、市場の方へもっていくと、市場どう思うね。こんな大きなナマズ誰が持って来いって言った。川まで行ってほかってこい。大きくて食えん、こんな大きなやつは一匹蒲焼にすると、万しゅうのようになると、誰が食わせるって、ほかってこいって言って、ほんで漁師獲らんがね。獲らんとよけい大きくなってまって、でーこの400グラムぐらいのナマズが一番いい。そいつが今、2キロのようもあるがね、長さが1メートルぐらいある。ほんでいらんて言う。

ほんでね、今の海から来る奴、先程私、言ったら、マス、アユ、ウナギ、カニ、全部海から来るやつちゃうね。そんなもんあんた、河口堰のとこ通ってこな、来られせんやつばっかや。で、今の話、新聞やなんかで水資源が、今年はアユが沢山のぼった、アユはな、人間で言ったら保育園や幼稚園や、人間見とったってどこでも通ってくるで、サツキマス一匹でも見た事あるか。で、私らそう言ったるけど、で、そういうことで、今の話で、ガラス窓のどこでものぼって来るは、ガラス窓のどこでも。のぼって来るけれども、昔のこ

と思ったら、てんでのぼって来るうちの数に入らんわ。

そしてね、どうしても遡上が遅い、のぼってくるのが。ほんで、よう大きなれへんがね、川へ入ってきてから、小さなもんで。私んたあ漁やっところとかが38キロですが、船おりたところが、38キロ地点では、水がこうやって濁水しとると上流の方に向かって流れていくがね水が、どういうこっちゃという、今日なんやった潮は、今日大潮や、ほうかほんでかー、私ら潮の加減、海の漁師でもねえに、潮の加減を見て漁に行かないかん。そういうような川になってまったんやでね。まあ、是非一つ助けたってくだせえ。

本当に、あの、名前だけはええ川や、長く良い川。名前だけや。一番悪い川になってまった。本当にね、仰山漁師もおりましたけど、だんだんだんだん減ってってまって、そりゃ、生活できんでやらんはね、生活できやるんだ、そういうことでね、本当によろ、私ら大橋兄弟、私81と6か月になったがね、まんだ川へ行くがね。ほんとにね、まだあんた、長良川。先程もおっしゃった先生みえたけど、川へ行くとさえが、まず一番さっき気になんのが川の水、水色、今日もきれいやな、ありがたいなあ言っっては、一番さっき、魚よりも水の色が苦になります。

そういうことで、長く良い川でございますので、ぜひ皆さん、助けたってくだせえ、お願いします。

(原田委員)

本当に切実な思いでお話いただきました。そういった次の世代をこれ担っていくためにも、その川が良くなければならぬし、川のお魚も札東が沢山なければならぬ。そのためには、あつてはならない人工物もなるべくない方がよいというのが大橋さんのお話です。

きれいな清流を写真を残していらっしゃるカメラマン、写真家でいらっしゃる磯貝さんの方からもちょっと一言いただいでいいですか。最後になってまいりましたのでね、はい。

(磯貝政司氏)

先程ちょっと写真の説明の中でふれたんですけども、これが水資源機構さんが出してる、ちょっと小さいので後でこれ見てください、パンフレットです。著作権が私にないのになぜここにあるのか、不思議に思われるといけませんので、ちょっと簡単に説明します。郡上八幡のコンテストに私出したんです。出しましたら、この写真はですね、入選ぐらいになったんですね。1位を私取りましたけど、1位はまた別の写真です。これはほんとに入選外で、始め皆さん当たり前のように思ってたんですけど、この写真が。それから本当に川と人の距離がだんだん遠くなるに従って、郡上八幡の町も見直したようで、パンフレットの一番の表紙に使うんですよ。確かに、その、この同じさっきの同じ写真ですけども、やっぱり川と人、川と生き物、それは距離を開けてはいかんと思うんですよね。本当の里川、私いつも言うんですけど、里川、里川っていうのは、あの、造語ですけども、里山、里海というのはあったんですけども、里川と言うのは、ミツカン酢センターのプロジェクトチー

ムが造語で造ったようですけども。とにかく川に里川、長良川を里川にっという、岐阜県もそういう発信してます、メッセージを。だから、本当の里川にするためには、上流から河口まで、水が流れて行く事、一本の川とならなきゃいけないと思うんですよね。それから、大橋さんが言うように、逆流するようになったら川じゃないですよね。だから、とにかく一本の素晴らしい川にして、名前のごとく長き良き流れの川を何とか皆さんの力で取り戻していただけたら、ほんとに長良川も喜ぶと思います。どうぞよろしく願いいたします。

(原田委員)

はい、素敵な写真でもって、次の世代へ受け継ぐという重要な要素でありますもんね。いい写真を撮り続けていただきたいと思います。

秋山さん、次の世代への継承というのもきっと始まっているかと思うんですけども、ままならない現状なのかなとも、察しられますが、最後その継承のあたりを触れて頂きながら。

(秋山雄司氏)

全国的に見てもですね、組合員の平均年齢って65歳以上だと思うんですね。天竜川漁協についても、毎年20代が入ってくるのが、一人か二人です。で、亡くなっていく方の方がずっと多いですよ、これは。そういう状況です。我々はその内水面漁協をどう考えるかという点で、NGOやNPOなどの団体いろいろ、ものすごくしっかり頑張ってますけども、河川関係者として、漁業法、漁業協同組合法で、権利が保障されてないわけなんです。ところが、内水面漁業協同組合ってというのは、その点であるんです、その権利が。これ強いですよ。その強さをやらずぶったくりで補償金もらってやってるから問題になる訳で、その強さを河川環境改善のために持っていけば、皆さんから圧倒的支持を得られます。それが一つですね。

もう一つは、皆さんが入ろうと思ったら、入れる組織です。まあ、全国で閉鎖的な組合、ありますよ。入れないよと、欠員なきゃ駄目だよ。あるけども、法律的には、入れざるを得ないんですよ、申請すれば。自分の川、住んでる所が漁業組合の区域にあります。決まってる、何々町何々郡とかね、そこに属してたら入れます。入れる条件、1年に30日遊魚すること、これを厳密にやってる組合一つもない。成り立たないですはっきりいって。だから誰でも入れる、逆説的に言えば。

そういう意味で、これはあの5月に水産庁のプロジェクトチーム（正式には内水面漁協内研究成果報告会）が内水面漁協の将来について発表会を開いた。その中でも言ってるんですけども、やっぱり大橋さんみたいな貴重な人は、これはこれで内水面漁業を助けていきなさい。同時に、自家消費とか、漁業、投網とかで少し頑張っている人たち、それが中心、中間にあります。もう一つですね、河川環境をやりたいっていう人、来たら積極的に入れ

なさいよと。これ（環境）だけやってたら、駄目ですよっていう、小さく書いてありますが、漁業やらなきやいかんのが漁業組合ですから。

この3つの方向性を持ってやれば、もっと市民に開かれた内水面漁業の展望が開かれる。私、私見ですけども、大橋さんは、これで飯食ってます。ほとんどの漁業組合員は飯は食ってません、漁業で、生業にかかわらない。飯に関わるっていう点では激烈な闘争起きるんですけども、そうじゃない遊びの部分、本当の部分ですとブーブーいわれる。遊びの部分で関われば、肩肘張ることないじゃないですか、そんなに。そういうことから言えば、内水面漁業の今後の有り方から言うと、面白い展開ができるんじゃないか。女性でも入れる、子供でも入れる。

私は、漁業組合長辞める時に、女性は来年タダにしようって言い残してったら、女性がタダだと男女差別になっちゃうってポシヤったんですけど、まあ、そういう状態です、はっきりいうとね。でも人口の半分は女性ですから、女性が半分だっておかしくないわけです。まあ、それはちょっと余談ですけども。

そういうように内水面漁協が、これからそんなに垣根ないよと、もしやる気があれば、環境問題でやれますよ、そういうところに一歩足を踏み込んだらどうですか、待ち構えているのは、むくつけきっていうよりもむしろ、頭の固いお年寄りの漁業組合員が昔からいるわけですけども、「これ俺らの川」だと。「俺らの言うこと聞かんか」と、という方いらっしゃるだけけれども、先ないですよそれは、10年経ったらいなくなるわけですから、もう、これ若いひとの天下ですよ。そういう展望を、韓国は25年かけてやってらっしゃる。そういうスパンで肩肘張らずに少しのんびりやれたら、絶対展望開けますって、多数派作ればいいんですからはっきり言ってね。そこをこれからやっていくべきかなと思ってます。

（原田委員）

頼もしい。

（秋山雄司氏）

もう一点。子供大事にしてください。子供連れて来れるお母さん大事にしてください。ここをやれば将来的にいいかもですよ、これは。

（原田委員）

女性、キーワードですね、じゃあ、女性。料理もしなきゃならないですね。

（秋山雄司氏）

ええ、もちろんそうです。

(原田委員)

いい料理をして食べて、消費して、お魚、川魚を沢山使うということ大事ですもんね。

(秋山雄司氏)

あの、うちの組合は出前釣堀で、その学校の校庭まで行ってお母さんたちと子供集めて、釣らして、はさみ一本で料理して食べるまで教えています。

(原田委員)

お魚釣るの好きな方は沢山みえるのに、っていうことですよね。その方々を取り込んでいこうという新しい試み、どんどん時代は変わっていく、心強いですね。

あの山本さんどうですか、あの山本さん、そうすると若手の、どうみても若手の方ですよね。ホープですよね。希望がむちゃくちゃありますよね。イケメンですしね、山本さん、若手引き付け魅力対策をお願いします。

(山本委員)

私もおやじの部類に入って来たので。

(原田委員)

まだまだですよ。

(山本委員)

子供がですね、今ちょうど小学校4年生で川ガキになる年代ですよ。先月、今月ですか、三重県で、清流で有名な銚子川に二人で行ってきて、遊んでまいりました。先ほどの吉田川の飛び込むところですか、ああいうところが銚子川にもあってですね、魚飛溪というところなんですが、私自身、都会育ちなんで、ああいうことやった事ないんですよ。

(原田委員)

都会育ちなんですか。

(山本委員)

はい、大阪の街中で。

(原田委員)

だけれども今、そういった川で川の研究、川にも出ていらっしゃるんですよ。

(山本委員)

最近出れてないんですけど、事務仕事ばかりで。基本、川の研究でやっておりまして、そういったところで、自分への教育ですか、子供に教えつつ私も経験して。

(原田委員)

のちのちは漁師ということで、こういった育成をね、あの一、研究をされながらも、お魚を釣っていただく方が増えるといいですよ、大橋さんどうですか。大橋さん、もうちょっと眠ってらっしゃいます。えっと山本さんのお隣にも都会人、どうみても都会っ子ですけども、でも実は常には作業服を着て森の中にいらっしゃるって聞いたんですが本当ですか、蔵治先生。

(蔵治委員)

もちろん、それは本当です。あの一なんていうか普段、仕事の時まあ、地下足袋、スパイク付き地下足袋を履いて、そこにヒル対策を施して、山に入るわけですけど、まあ、それは、私、好きでこの仕事を選んでやっていますが、そういう好きで選ぶ学生っていうのは、やっぱりどんどん減ってるんだろうなと思うので、そりゃやっぱり生まれた時から大学に入るまで、1回も山に行ったことがない、川に入ったこともないっていう事がやっぱりとても困った事なんで。もうしょうがない、これは教育だと思って強制的にでもそういう事をやらないと、本当に滅びちゃうんじゃないかっていう心配があるんですよ。

(原田委員)

すごく嬉しいですよ。東大の優秀な方々が、これから未来を背負って下さる方々こそが、実はそうやった現場に入って、最も大事な部分に触れているという教育をしてくれているという、蔵治先生も山本研究員さんも、すごいなと思っております。うれしいですねえ、大橋さん。スイッチ入りましたか。

(大橋委員)

私もほんとに、この、漁師やっとして、皆さんが生活できんで、だんだんだんだんやめてきちゃって、そうかって、今の話で、私んたあ、漁師やで陸へあがるわけにもいかんなって、言っはね、ほんとに長良川も、この80年付きあっとして、ばばっちい川の時もありました。ほんとにばばっちいって、アユもサツキマスも売れん時もあった。

そういう時もあったけど、ほんとにね、やっぱ長良川の近くに生まれて良かったなあって言っはね。それからこの、読み書き甲子園っていう番組に、大橋さんちょこっと話聞かしてもらえんかっていって、高校生が、岡山県の女の子やったか来て、で、読み書き甲子園やで東京で発表会があって、大橋さん賞に入ったで東京まで来いって。東京行ったらどこ行ってまうかわからへんやないけって、冗談言っよう行かなんだけど、そういうこ

ともあった。

本当にいろいろこの、漁師やとったおかげで、立派な方々とお話もできて、ほんとに幸せでした。ありがとうございました。

(原田委員)

これからも元気にご活躍くださいね。磯貝さんありますか、最後に。

(磯貝政司氏)

最後に、私18年かけて、この大橋さんの。

(原田委員)

大橋さんのことがよくわかる。

(磯貝政司氏)

ことを本にしました。この副題に「僕んたァ、長良川の漁師に生まれてよかったなあ」って、書いてますけど、今、しゃべっていただいた大橋さんのことがそのままに。是非、興味のある方は、市民学習会で扱ってます多分ね。

(原田委員)

どこで売っているんですか。

(磯貝政司氏)

一般書店に行ってもね、一応ありますけれども、大手の出版社しか扱いませんので。こういう地味な本は扱いませんのでね。市民、あの、あそこの武藤さんですね先ほどの。

(原田委員)

武藤さんの所に行くところあるんですね。

(磯貝政司氏)

そこに行けばありますんで、利益は全部長良川に寄付しますので。

(原田委員)

それでは、是非、皆さん。

(磯貝政司氏)

是非、武藤さんの方に、注文をしてください。

(原田委員)

注文を出してください皆さん。

(磯貝政司氏)

それと、今日、素晴らしいわかりやすいパンフレット「166キロの清流をとり戻すために」が。

(原田委員)

ここに磯貝さんの写真が。

(磯貝政司氏)

いや、それは別にしてね。

(原田委員)

沢山載ってますよ。

(磯貝政司氏)

すごく読みやすくなりました、すごく。私でも理解できます。

(原田委員)

皆さん、お手元にね。今日は、募金とかしちやいけないんですね、この会場はね。でも、ぜひこれ増刷したいですね。増刷できたらいいなと思いますのでね、何かどっかで、皆さんの基金集めたらどうかなと思いますけれども、この会場ではできませんので。

すごく立派なもので、一生懸命委員の皆さんが作ったという事ですので、しっかり皆さん読んでいただきたいと思いますね。磯貝さんありがとうございます。

ずいぶん長くお待たせしましたが、最後に李さんに一言いただきたいなと思うんですけど、李さんお待たせをいたしました。昨日も、昨日来られて、長良川河口堰もご覧になられまして。前の方にいいですか。李さんもイケメンですよ。

(李根熹氏)

今日、私もナクトンガンの川を紹介させていただきましたけど、今日、いろんなことを学ぶこともできました。これからも、この愛知県の長良川と釜山のナクトンガンの関わりで、もっと協力したいと思います。それで、是非、この長良川の堰も開門すれば良いなと思います。ということで、これからもよろしくお願いします。

(原田委員)

ありがとうございました。李さん、ちなみに、韓国の方には、このような絶滅危惧種的な漁師さんはいらっしゃいますか、

(李根熹氏)

そうですね、非常に漁師さんとの交流というか、情報の共有と、それをすれば、良いなと思ってます。民間団体としてね。

(原田委員)

ねえ、そう大橋さん。行きますか、韓国に。

(李根熹氏)

韓国はあんまりないと思いますよ。

(大橋委員)

韓国に。アンニョンハセヨだけしか知らんでね。

(原田委員)

あ、そうですか。あとは、どっちにしてもあの、その大丈夫、大丈夫ですね。日本語が、名古屋弁がすごいですけど、ちなみに李さんわかりましたか。大橋さんの会話。

(李根熹氏)

ああ、難しい。

(原田委員)

河村市長並みの難しさがありますよね、それが魅力ですね。

(原田委員)

すみません、李さんありがとうございました。どうぞ、また名古屋にぜひお越しいただきたいと思います。

会場から、質問というお約束をしてましたので、一つだけ、ちょっと時間過ぎてますけど、一つだけ、お願いします。これで最後になりますけれども一つ質問を聞きまして、簡単に答えていただいてお開きとさせていただきたいと思います、お願いします。

(傍聴者)

豊明から来ました前山と申します。簡単に、すごい立派な冊子ですよ、ざっと見まし

た。それで最後から2ページ目ですが、41ページ、ここに専門家による合同会議を提案してはいるけれども、国土交通省が設置に消極的だとう書いてあります。なぜでしょうか、ちょっと理由をお聞かせください、以上です。

(蔵治委員)

いや、でも残念ながら、それは国土交通省さん以外の方が答えてはいけない質問ではないのかなと、思うので、もしここにいらっしゃるようであればですね。

(原田委員)

会場の中に国土交通省の方みえてますか。

(蔵治委員)

でも多分、はいと言って立場の方もいないでしょうから、あのこれはですね、あの、委員会の方で引き取って、その委員会として正式に国土交通省に文書で、あのお手紙を出すという事は可能かもしれない。なぜでしょうかって、書いて、公式文書を愛知県から送っていただければ、まあ、返答があるかないか分からないですけどもってことじゃないかと思います。

(原田委員)

ねえ、前向きな終わりですよ。終わりの1ページというのは。そういった今後のために課題を残したという。

(蔵治委員)

ちなみに、もうちょっと補足させてもらおうと、ここに「消極的です。」って書いてあるんですけど、国土交通省が消極的だと表明したっていう事実はありませんので、それはちょっと間違えないようにしていただきたいです。

これは、私どもが消極的のように見えると推測しているという意味ですので、彼らは公式見解で消極的だとか、積極的だとかいうことは言ったことは一言もないと思われませんが、はい。ちょっと、そういう感じなので、柔軟取り混ぜた対応も必要なのかなと思っているところです。

(原田委員)

はい。

(蔵治委員)

あと、折角なので、1点、今、小島座長が、お帰りになって。ちょっと東京の都知事選

挙の関係で、お帰りになっちゃったので、彼の最後のメッセージを代弁しておきたいと思うんですけど、彼はいつも言っていることがあって、「大橋さんがこうやって元気で漁をやっている間に、何とかプチ開門だけは実現させたい。」と言うことを小島座長は常におっしゃっていますんで、代わりに紹介させて、勝手に紹介させていただきました。

(原田委員)

はい、ありがとうございます。皆さん、3時間にわたりまして、お付き合いくださってありがとうございます。ご登壇いただいた先生方もありがとうございました。

皆さま、アンケートの方、是非、ご記入をお願いします。今後の、委員の方の運営に生かさせていただきます、アンケートの方お願いいたします。

今回、第3回でしたけれども、第4回と続いてまいりますので、また、その機会には是非、足をお運びくださいますようお願いをいたします。

司会は原田さとみでした、どうもありがとうございました。

以上